

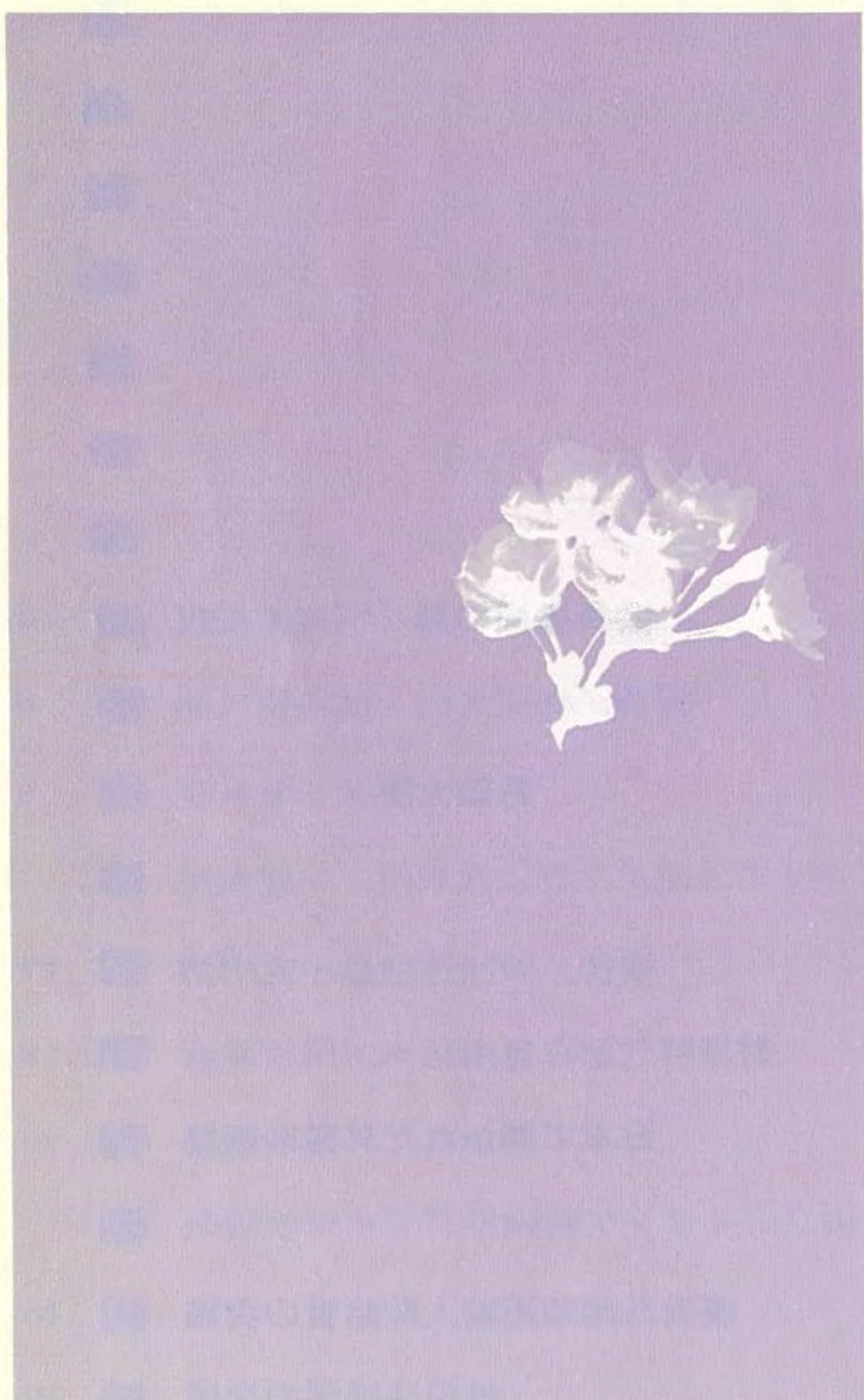
外配協 10 年の歩み

■ 外配協10年の歩み

会長巻頭の辞／川喜多長政	4
祝辞／通産大臣・椎名悦三郎	6
各国大使メッセージ	8
スウェーデン大使／イタリア大使／フランス大使／ソ連大使	
祝辞／映団連会長・大川博	17
割当時代から自由化へ／田村幸彦	18
日本で開かれた外国映画祭	20
フランス映画祭／ソ連映画祭／スウェーデン映画祭／イタリア映画祭／ドイツ映画祭	
優秀外国映画輸入配給賞の実施	26
外国映画展の開催	30
各部会の活動	35
理事会／総務・経理部会／製作・渉外部会／営業部会／宣伝部会／外国映画通関連絡協議会	
主要年表・1958～1967	38
加盟会社・商社録	44
10年間の外国映画概況	47
外配協の組織	48

■ 巻頭の辞

社団法人外国映画輸入配給協会会長
川喜多 長政



外国映画を輸入して、広くこれを一般に公開する事業は、国際的並に社会的に大きな意義を持っているが、同時に重大な責任を負わされている。その事業が国際関係と国内の社会風潮に及ぼす影響が甚大だからである。

現在全世界で製作されている劇場用長編映画の数は大体約2796種。これが世界に散在する約81292の映画興行場で公開上映されており、日本で上映される外国映画は、その内、年間約250本である。

映画は、それが特別に設備された薄暗い環境の中で映写されるため、観衆の注意がよく映像に集中されるから、うける印象は強く、影響は非常に深い。

私は、映画貿易に従事するものの最大の関心事は、その取扱う映画が輸入国の大衆に与える影響であり、同時にその原産国国民大衆の誇りに対する配慮であらねばならぬと信じている。

これ等の点を重視して、多くの国々では映画産業を国家が管理し、或いは政府が補助金等を支出して、その製作、配給、並に輸出輸入に深い関心を示している。自由主義を標榜するアメリカ合衆国ですら、政府と映画産業は密接に結ばれている。

日本政府も、戦後、映画産業の重要性を認め、この産業の各面にわたって、積極的支持の態度を示すようになったことは、喜ぶべきことである。

社団法人外国映画輸入配給協会は、こうした実状の下に、通産省の指導によって発足した。

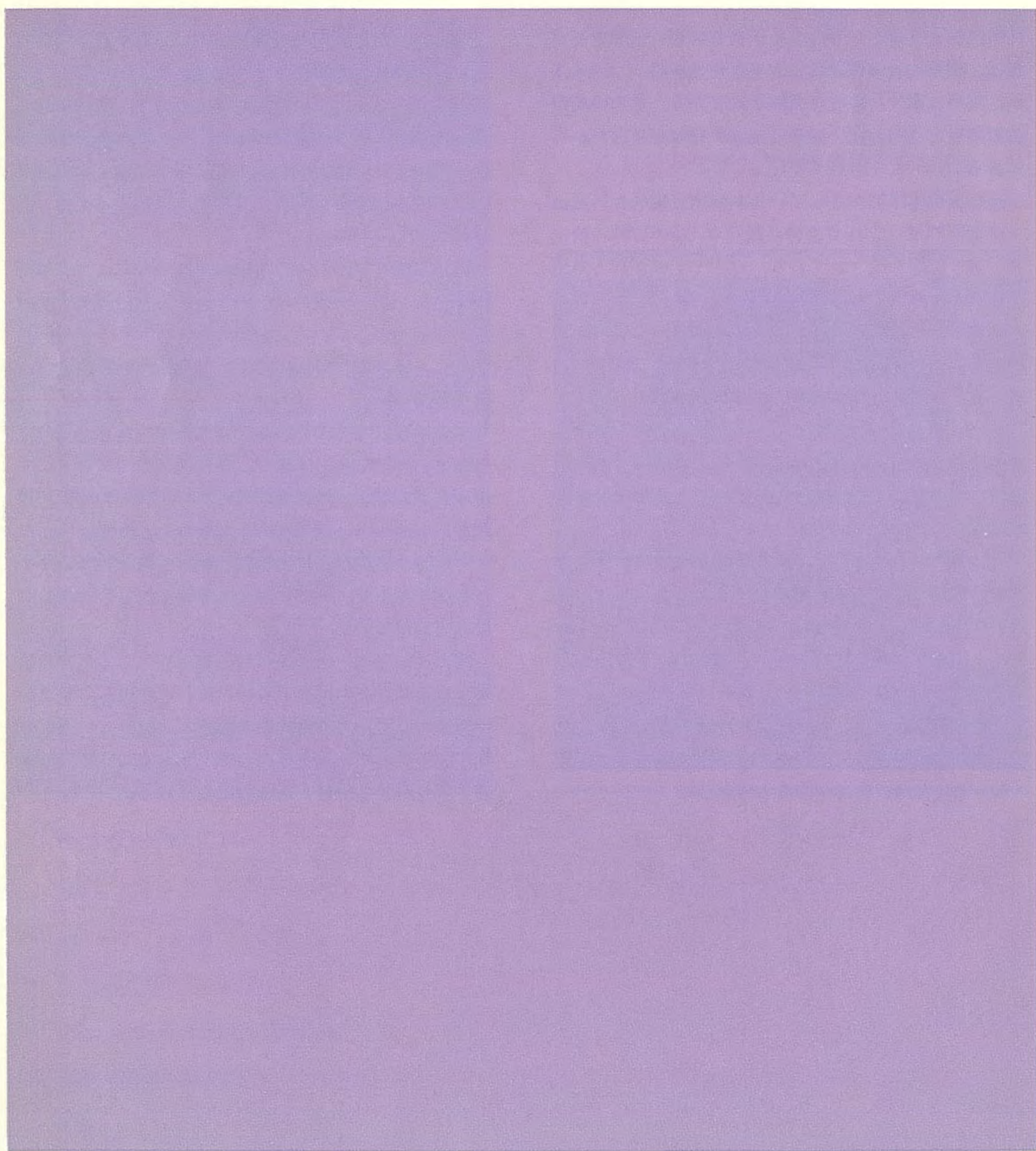
協会は、その定款に明記してある通り、外国映画の国民生活にしめる重要性に鑑み、輸入される外国映画の質的向上と、外国映画輸入配給事業の健全な発達を図り、我が国経済の発展と文化の向上に寄与することを目的としている。

設立以来十年、この目的達成のため今日までに協会加盟各社が果した実績については、本文に詳しく記載されているが、この協会会員の輸入面での活動が、相対的に日本映画の輸出に大きく役立っていることは、看過できない。

又協会は、来訪する外国映画代表団の歓迎や接待につとめ、外国製作者団体が、在日公館の後援の下に開催する映画祭或は映画週間等に対し、積極的に協力後援し、映画による国際親善と友好につとめている。

これ等の活動が、日本映画の輸出に貢献していることも明かであり、映画は常に国際間で相互に交流しなければならない。

現在この協会への加盟に難色を示している外国系輸入配給会社も、1日も早くわれわれと提携し、業者が一致協力して、外国映画輸入配給業の健全な発展を計り、同時に、その重大な国際的、国家的並に社会的重責を果たしたいものと私は念願している。



■ 祝 辞



社団法人外国映画輸入配給協会の創立10周年に際し、お祝いを申し述べる機会を得ましたことは、私にとって誠に喜ばしいことであります。

貴協会は、邦人系映画輸入業者の協調、結束を図るため昭和33年に設立されて以来、つねに映画配給界をリードされ、優秀な外国映画の輸入に努力されるとともに、外国映画配給事業の健全な発達を図ってこられました。これは、ひとえに川喜多会長はじめ関係各位の御努力のたまものであり誠に敬服にたえません。

優秀な外国映画は、たんに国民の娯楽の内容を豊富にするばかりでなく、日本映画にとっても大きな刺激となり、わが国文化の向上に寄与するものと考えられます。通商産業省が昭和38年以来毎年「優秀外国映画輸入配給賞」を実施し、優秀な外国映画を輸入配給した会社を表彰して参りましたのも外国映画輸入配給業務の重要性に着目したからに他なりません。

今やわが国映画界は多事多難な時期を迎えておりますが、貴協会におかれましては、今後ともその使命達成のため一層の御努力を傾注されるようお願いするとともに今後一層の発展をお祈りしまして創立10周年の御祝いの言葉といたします。

通商産業大臣

椎 名 悦 三 郎

Jag ber att få framföra mina hjärtliga
lyckönskningar i samband med firandet av 10-
årsdagen för grundandet av Foreign Film Impor-
ters Distributors Association of Japan.

Dess verksamhet är synnerligen viktig för
fördjupande av den ömsesidiga förståelsen mellan
världens folk, särskilt här i Japan där filmerna
är av så hög kvalitet och filmen är så viktig som
media och folks medvetande så mottagligt för film.

Det har varit ett sant nöje att samarbeta med
föreningen vid ordnandet av den svenska filmfesti-
valen för ett år sedan.

Det var ett av de sätt på vilka föreningen
arbetar för att förverkliga sin höga målsättning
och jag hoppas att filmer från mitt hemland även
i framtiden skall gagnas av föreningens verksam-
het.

Jag önskar föreningen all lycka och välgång
i framtiden.

K. F. Almqvist
K.F. Almqvist
Ambassadör

■ スウェーデン大使 メッセージ



外国映画輸入配給協会の創立10周年に際し、私は心からお祝い申し上げます。

貴協会の活動は、世界各国、特に映画の水準が非常に高くしかも重要な媒体を占め、人々の心が感受性に富んでいる日本に於いては、相互の理解を深めるのに重要な役割を果たしています。

尚一年前「スウェーデン映画祭」が開催された折、貴協会と協力出来た事は、私にとって非常な喜びでした。それは貴協会として、その崇高な目的を達成する一つの方法でしたが、私は私の国の映画が将来に於いても貴協会の活動に役立つよう望んでおります。

最後に私は貴協会の将来の幸運と成功をお祈り申し上げます。

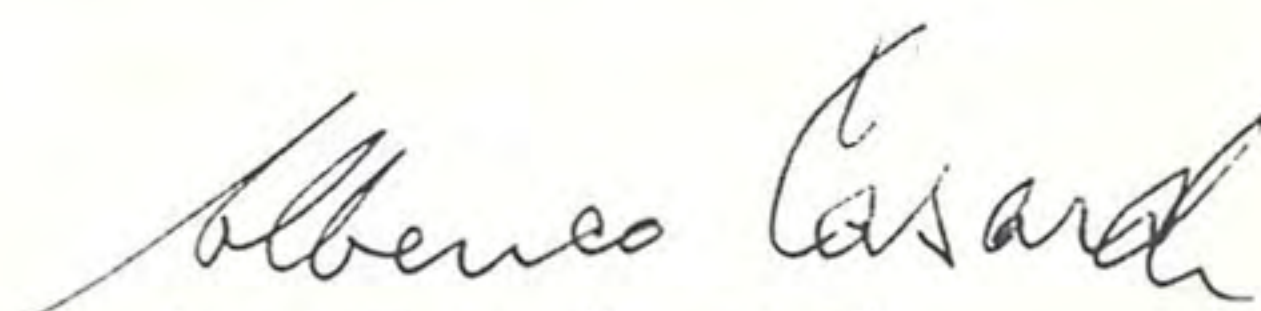
駐日スウェーデン大使

K・F・アルムクイスト

MESSAGGIO

Da tanto e tanto tempo l'Italia è un Paese alacre e pieno di fantasia: chi, come me, ha il grande onore di rappresentarlo all'estero, si trova spesso nella condizione di sottolineare le opere ed i frutti del lavoro e dell'arte italiani. Secondo me, questa condizione diviene assai felice quando si tratta di parlare o scrivere di films italiani, perchè la nuova industria cinematografica italiana dopo i folgoranti shocks del 1947 e del 1949 - "Roma città aperta" di Rossellini e "Ladri di biciclette" di De Sica - nei vent'anni che sono ormai quasi trascorsi ha felicemente mantenuto le promesse, producendo vere opere d'arte come: "Senso", "Rocco e i suoi fratelli" e "Il Gattopardo" di Visconti, "L'avventura" e "Blow up" di Antonioni, "La dolce vita" di Fellini, "I pughi in tasca" di Bellocchio e tanti altri. In questa lieta occasione - la ricorrenza del decimo anniversario della fondazione dell'Associazione degli importatori e distributori di films stranieri in Giappone - che posso dire se non che di tutto cuore mi complimento con l'Associazione per il brillante lavoro svolto nel diffondere in Giappone il film italiano e, sempre di tutto cuore, auguro i migliori ulteriori successi? Films italiani e films giapponesi: ecco due cose che rafforzano ancor di più i legami tra i nostri Paesi, perchè il Giappone è il Paese di "Rashômon" e di "I sette samurai" che, come "Roma città aperta" e "Ladri di biciclette" sono due pietre miliari nella storia della cinematografia mondiale.

Oggi l'Italia occupa il secondo posto nella lista dei Paesi esportatori di films: in parte questo si deve anche all'Associazione degli importatori e distributori di films stranieri in Giappone e spero proprio che l'opera di tale Associazione sia sempre più costruttiva e felice come, ad esempio, lo fu in occasione dell'attuazione della Settimana del film italiano a Tokyo, nel marzo 1964.


Alberico Casardi

■イタリア大使 メッセージ



イタリアは古来、想像力に満ちあふれ躍動する国であります。私のように外国においてイタリアを代表するという大きな榮譽をになうものは、しばしばイタリアの活動と芸術作品、その成果を強調するめぐりあわせになります。私の考えでは、イタリア映画についてお話しするとか書くとかいうときには、そうしためぐりあわせも大変うれしいものとなります。イタリアの新しい映画産業は、1947年と49年にロッセリーニの「無防備都市」やデ・シーカの「自転車泥棒」によって稲妻のような衝撃を与えてからほぼ20年を経ながら、最初の約束を見事に守り、ヴィスコンティの「夏の嵐」「若者のすべて」「山猫」やアントニオーニの「情事」「欲望」、フェッリーニの「甘い生活」やベッロッキオの「ポケットにげんこつを入れて」、その他たくさんの本当の芸術作品を生み出しております。今度日本における外国映画輸入配給協会の創立10周年の記念行事の機会に、同協会が日本においてイタリア映画を普及した輝かしい業績に讃辞を述べさせていただくとともに、イタリア映画が最良の成功をおさめることを心から願うものであります。イタリア映画と日本映画というこの二つのものは、私たち両国の絆を一段と強めるものであります。なぜならば、日本は、「無防備都市」や「自転車泥棒」のように世界の映画史における二つの道標である「羅生門」と「七人の侍」の国だからであります。

今日、日本で輸入されております外国映画のうち、イタリア映画は数の上で第二位を占めておりますが、これも一つには外国映画輸入配給協会のおかげであり、私といたしましては1964年3月東京で行なわれたイタリア映画週間の実現のように、同協会がますます建設的な優れた活躍をなさることを期待するものであります。

駐日イタリア大使
アルベリコ・カサルディ

MESSAGE

Je suis heureux de pouvoir saisir l'occasion de son dixième anniversaire pour exprimer à l'Association des Importateurs Distributeurs de Films Etrangers au Japon ma reconnaissance pour le remarquable travail qu'elle a, depuis sa création, accompli dans ce pays en faveur du cinéma français.

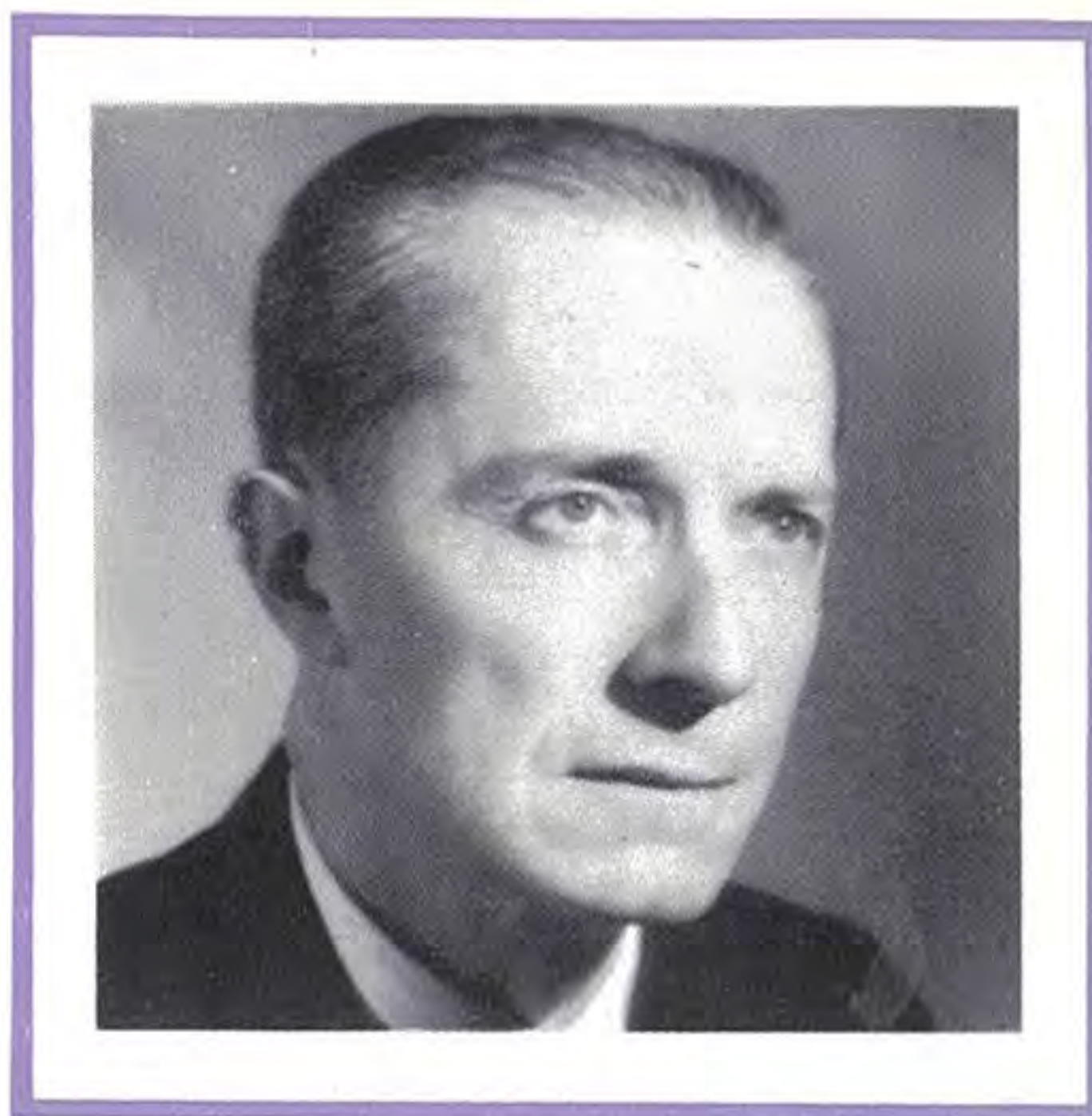
Il me suffira de rappeler que depuis 1958, sur un total de quelque 300 films français exploités au Japon, plus de 250 d'entre eux ont été importés par les sociétés membres de l'Association. Celle-ci a également prêté son concours efficace à l'organisation des trois Festivals du Film français qui se sont déroulés à Tokyo en 1959, 1963 et 1966.

Je souhaite que l'Association des Importateurs Distributeurs de Films Etrangers au Japon poursuive dans l'avenir, avec le même allant et le même succès, ses fécondes activités, et que grâce à ses efforts, le cinéma français continue à rencontrer auprès du public japonais la même audience que par le passé./.



Louis de Guiringaud
Ambassadeur de France au Japon

フランス大使 メッセージ



このたび外国映画輸入配給協会が、創立10周年を迎えられたことを心からお慶び申し上げ、創設以来、日本におけるフランス映画の普及に御尽力下された業績に対し、感謝の意を表したいと存じます。

1958年以来、日本で公開された300本に余るフランス映画のうち、250本以上が外配協に登録された各社を通じて輸入されている事実を思えば、その業績は十分にうかがえるものと思います。

1959年、1963年及び1966年の3回にわたって催された「フランス映画祭」の執行に関しても有益な協力を貸していただきました。

私は、外国映画輸入配給協会が今後も変らぬ歩みと成果をあげて実りある活動が続けられ、いっそうの努力によってフランス映画が過去と変らぬ日本の観客との接触を保ち続けるものと期待しております。

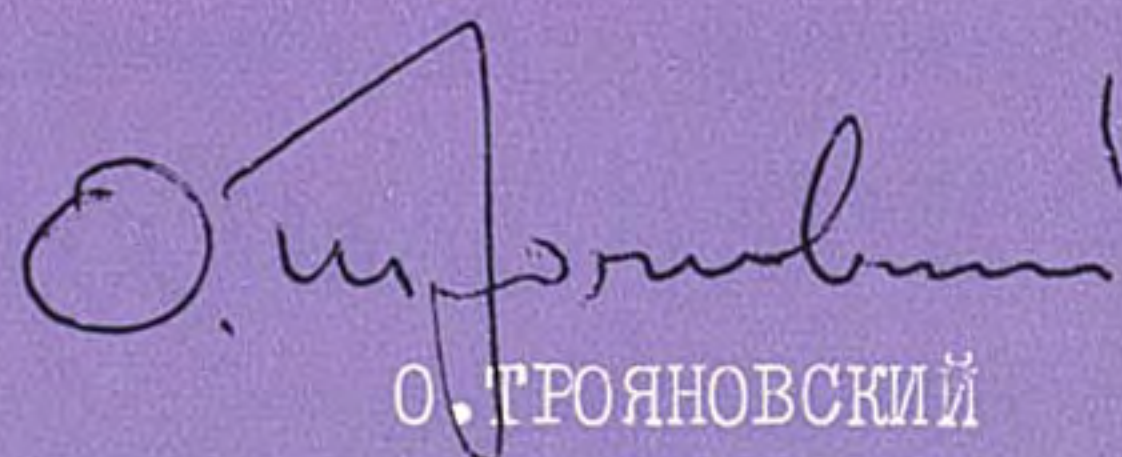
駐日フランス大使
ルイ・ド・ギランゴー

Мне доставляет удовольствие приветствовать Ассоциацию "Гайкайхио" в связи с десятилетним юбилеем ее создания.

Как известно, киноискусство является одним из наиболее важных художественных средств воспитания народа. По силе своего воздействия на чувства и умы людей, по охвату широких масс ничто не может сравниться с киноискусством. Кино является также одной из важнейших форм общения между народами; оно дает возможность ближе познакомиться с жизнью людей в других странах, лучше узнать их историю, глубже понять их думы и стремления.

За последние годы связи между нашими странами в области кино значительно расширились, и в этом немалая заслуга вашей Ассоциации.

Позвольте мне, пользуясь случаем, поблагодарить Ассоциацию за помощь, которую она оказывает в успешном проведении ежегодных кинофестивалей советских фильмов в Японии, и пожелать успехов в ее деятельности.



О. ТРОЯНОВСКИЙ

ПОСОЛ СССР В ЯПОНИИ

ソ連大使 メッセージ



外国映画輸入配給協会創立10周年記念の御祝詞を申しあげることがを嬉しく思います。

御存知のとおり、映画芸術は民衆教育の非常に重要な芸術手段の一つであります。人々の感情や知性への影響力という点で、広汎な大衆を把握するという点で映画芸術に比肩しうるものは他にありません。映画はまた諸民族間の交流の最も重要な形式の一つであります。それは他国の人々の生活をより身近に知り、彼らの歴史をより良く理解し、彼らの気持や志向をより深く理解する可能性を与えてくれます。映画の分野におけるここ数年間の我々両国間の関係は著るしく広まりました。そしてこれには貴協会が少からず貢献されました。この機会を利用し、日本に於いて毎年おこなわれるソ連映画祭の成功的な開催のために貴協会が示された御援助を感謝するとともに貴協会の活動の成果をお祈り申し上げます。

駐日ソ連大使

オ・トロヤノフスキー

■ 祝 辞

社団法人映画産業団体連合会会長
大 川 博

社団法人外国映画輸入配給協会が創立されて、こゝに十週年を迎えられることになりましたことは誠に慶賀にたえません。

十年前、昭和33年という年は、くしくも当映団連が映産振といって個人会員を主体としていた団体を、現在のように映画産業各領域を代表する団体を正会員として改組した年であり、外配協が結成され、新人正会員として加入された、ご縁のある年でもあったわけであります。

十年一昔といいますが、外配協が辿られてきたこの十年の歴史は、そのまゝ映団連の歴史の一部でもあり、誠に感慨深いものがあります。

十年前のわが映画産業界は、今となっては記録的ともいえる11億余人の動員数を数え、一見黄金期を呈したかに見えましたが、幾多の問題点を持っておりました。

主なものとしては、

- =入場税が五段階制によって徴集されていた。(運動の結果三段階制となり、更に運動の結果、今日では一律10%となった)。
- =物品税が映画産業機資材全般にわたって課せられていた。(運動の結果、製作機資材が非課税となり、今日では、すべて非課税)
- =外国映画の輸入方針が輸入業者単位から配給業者単位に切かえるという大蔵省方針が予告されていた。

この最後に記述した項目は、当時は大問題であって、映画界の秩序維持のためには、映団連としても何等かの解決が必要であった。

この間にあって、現在の川喜多会長を中心に外配協が設立され、当映団連と呼応して、その都度映画輸入方針の変化に対しても、良く政府の諮問にこたえ、業界の意見を統一せられ、今日まで大過なく運営せられてこられた功績は、会長を始め、会員各位の真摯なご努力の結果と深く敬意を表する次第であります。

今わが国映画界は、ようやく復興の段階にあり、また1970年、万博を機に、国際映画祭を開催せんとしております。

貴協会の使命は益々重大となってまいりますことと存じますが、益々のご隆昌ご発展をお祈りいたします。





● 割当時代から自由化へ

田 村 幸 彦

今から10年前の昭和33年7月29日、新橋倶楽部に次の人々が集った。

東和映画株式会社取締役社長	川喜多長政
同社総支配人	山根 正吉
映配株式会社取締役社長	塩次 秀雄
同社相談役	岡田喜三郎
株式会社ニッポン・シネマ・コーポレイ ション取締役副社長	島田八洲直
同社営業・宣伝部長	伊沢 誠康
新外映配給株式会社取締役	鈴木 一誠
同渉外担当	中込 純次
松竹株式会社取締役	月森仙之助
東宝株式会社取締役	米本 正
大映株式会社取締役社長	永田 雅一
同社洋画部長	浅野 辰雄
同社外国部次長	吉田 修一
新東宝株式会社専務取締役	山梨 稔
同社営業調整部長	武田 俊一

この会合は、永田雅一氏が世話人となって開かれたもので、席上同氏から次のような挨拶と説明があった。

「今般映画界全体の動きとして、従来の社団法人映画産業振興会が発展的に改組され、映画産業に関係する諸団体を基幹会員とする映画産業団体連合会が設立されることになり、また先般昭和33年度外画輸入方針が発表され、来る昭和35年度より、外国映画の輸入割当は、配給業者単位となることに決定したので、この際、外国映画を常時配給している我々同業者が団体を結成して、新たに発足する社団法人映画産業団体連合会に加入し、映画産業の一翼として斯業の発展に寄与したく、外国映画配給業者協会設立の可否について、皆様のご意見を承わるため、世話人として本日の会合にご参集をお願いした次第であります」

出席者に異存のあろうはずはなく、設立準備会はそのまま創立総会に移行され、理事と監事が選任されたうえ、理事の互選で会長が川喜多長政氏、副会長が塩次秀雄氏と決定した。

当時外国映画の輸入は、大蔵省から毎年外国映画輸入方針が発表され、それに基づいて各社に割当本数が与えられていた。割当は配給会社だけでなく、輸入専門の会社にもあったので、今から思うと隔世の感がある。

試みに、昭和33年度の外国映画割当本数を見ると、次のようになる。（グローバル地域と非ドル地域との区別もあったが、ここでは一括した数字にして置く）

メトロ15、フォックス13、パラマウント14、ワーナー14、コロムビア9、RKO8、ユニヴァーサル11、

リパブリック5，ユナイト7，アライド5。

東和14，英国映画協会8，大映7，松竹1，東宝4
映配6，イタリフィルム6，新外映2，ロバート・ル
ーリー2，海外映画2，新東宝1，ユニオン6，大和
4，泰西1，北欧1。

このほかに，日本映画の輸出ボーナス・クォータが
数本あったが，これでは米，英，仏，伊，独の映画を
輸入することは許されなかった。

何しろ年間166本の外国映画しか輸入できなかった
のだから，割当を取った輸入専門の会社は，1本につ
いて何百万円というクォータ料を取って，輸入した映
画を配給会社へ売りつけることができた時代で，配給
業者の協会を作って，相互の利益を守ろうとする協会
の設立目的は，まことに時宜を得たものであった。

昭和34年1月からは，ヘラルド映画，昭映フィルム
独立映画の三社が加入し，協会の名称も外国映画輸入
配給協会と改められ，6月には松竹セレクト国際映画
株式会社と中央映画株式会社が，それぞれ松竹，東宝
の子会社として設立され，外国映画の配給を始めたの
で，松竹と東宝とは退会，その年8月，独立映画が退
会して，太洋映画株式会社が加入した。

昭和35年には，1月にイタリフィルム社が入会，2月
には企業合同によって太洋映画が退会，3月にはやは
り企業合同によって新東宝洋画株式会社が退会した。
この年4月から外国映画の輸入は配給業者単位に改正
され，割当本数も年間191本と相当大幅に引き上げら
れた。その月大和フィルムが入会，8月には東和映画
株式会社と中央映画株式会社が合併して，東和株式会
社が創立された。

昭和36年になると，貿易の自由化が政府の方針とし
て打ち出され，映団連にも自由化対策委員会が作られ
て，協会からも代表者が会合ごとに出席，また大蔵省
との懇談会も二回催して，邦人業者の立場と意見とを
詳細に説明する努力が行われた。この年8月には，ニ
ッポン・シネマ・コーポレイションとヘラルド映画株
式会社が合併，日本ヘラルド映画株式会社が設立され
た。この年の外国映画割当本数は，前年度に比べて40
本も増加し，合計231本となったが，これは各社とも
一律に2本ずつ増加されたためで，この年にはまた，
従来任意団体であった当協会が，社団法人に改組され
る方針が決定し，その準備が着々と進められることにな
った。

昭和37年3月13日，通産省の認可を得て，社団法人
外国映画輸入配給協会が正式に発足した。この年4月
に発表された外国映画割当本数は，前年度よりも44本
増加して，275本という莫大な数量となり，マーケッ
トが必要とする年間250本を上回るようになったところ
から，下手な映画を輸入したら，封切もできないと

いう事態が起りはじめこのため外国映画は完全な買手
市場になり，輸入配給会社の苦難時代が始まった。

イタリフィルム社の社長として，創立以来良心的な
映画の輸入を続けていたジェリアナ・ストラミジョー
リ女史が退陣したのは，この年の春で，10月には松竹
セレクト国際株式会社と映配株式会社が合併，松竹映
配株式会社が設立された。

昭和38年4月1日に発表された外国映画割当本数
は，前年度と同数であった。4，5年前から外国映画
の配給に乗り出していた株式会社東急文化会館が4月
1日当協会に加入し，7月にはイタリフィルム社が東
京第一フィルム株式会社と改称，数年前から業績の振
るわなかった新外映は，この年になって経営が行きづ
まり，12月に富士映株式会社に肩代りしたが，この会
社も翌年3月にはヨーロッパフィルム株式会社と社名
を変更し，経営者が交替した。しかし競争激甚な映画
配給業界にあって，この程度の会社では到底存続はお
ぼつかず，1年も経たないうちにお手上げになってし
まった。

昭和39年7月1日，遂に外国映画の輸入自由化が実
現した。一部で懸念されていたように，外国映画が一
時にドッと押し寄せて，わが国の映画市場を荒すとい
うようなこともなく，封切系統が整備されているため
に，その後の年間封切本数も，大体250～60本という
ところに落ちついた。また一擲千金の一旗組が外国映
画の配給に乗り出すという現象も殆んど起らなかった
が，それよりもむしろ，弱体の配給会社が倒れ，健全
経営の会社だけが残る方向に進みはじめたといえるの
である。

昭和40年1月には，昭映フィルムが倒産して退会，
41年3月には，株式会社東急文化会館が，外国映画の
配給部を廃止して，興行一本に方針を切り替え，4月
には大蔵映画株式会社も外国映画の配給を中止，邦画
の製作，配給に専念することになったし，アメリカの
メイジャー系でも，アナイド・アーチスツが支店を閉
鎖し，松竹映配に業務を委託してしまった。

昭和41年9月には，創立以来わが協会の副会長とし
て，協会の発展に多大の貢献をされた松竹映配株式会
社社長塩次秀雄氏が映配社長を辞任され，後任には，
松竹の社長城戸四郎氏が就任された。

協会も発足当時の十数社から，僅か5社に会員数こ
そ減少したが，邦人系の映画配給組織の信頼すべき団
体として，今や世界各国にもその存在が認められ，映
画を通じての国際親善にも，大きな役割を果たすところ
まで成長したので，今後も会員の結束を固くし，外国
映画を通じて，わが国映画界の発展に寄与したいと念
願している次第である。

日本で開かれた

外国映画祭

フランス映画祭



第2回 フランス映画祭

第2回「フランス映画祭」は、ユニフランス・フィルム、日本映画海外普及協会、外国映画輸入配給協会主催、外務省、フランス大使館後援、中央映画株式会社、大映株式会社、映配株式会社、東和映画株式会社協賛により、昭和34年6月8日（月曜日）から同13日（土曜日）迄の6日間有楽町読売ホールに於いて開催された。出品作品は「レ・ミゼラブル」（監督ジャン・ポール・ル・シャノワ、主演ジャン・ギャバン、セルジュ・レジアニ）、「自殺への契約書」（監督ジュリアン・デュヴィヴィエ、主演ダニエル・ダリュウ、ベルナール・ブリエ）、「いとこ同志」（監督クロード・シャブロール、主演ジェラルド・ブラン、ジャン・クロード・ブリアリ）、「二十四時間の情事」（監督アラン・ルネ、主演岡田英次、エマニュエル・リヴァ）の長篇4本、「セースの詩」（監督ヨリス・イヴァンス）の短篇1本に、「燃える大地」（監督アルン・タジェフ）、「アルピニスト絶壁に登る」（監督マルセル・イシャック）の長篇記録映画2本を加えた合計7本で、これにジュリアン・デュヴィヴィエ、マルセル・アシャール、ミレーヌ・ドモンジョなど来日した。

第三回「フランス映画祭」でやっと来日を果たしたアラン・ドロンと談笑する岩下志麻



第3回 フランス映画祭

第3回「フランス映画祭」は、ユニフランス・フィルム主催、フランス大使館、当協会後援により、昭和38年4月1日（月曜日）から同4月10日（水曜日）迄の9日間馬場先門東商ホールに於いて開催された。出品作品は「ミス・アメリカバリーを駆ける」（監督ロベール・デリー、主演ロベール・デリー、コレット・ブロセ）、「突然炎のごとく」（監督フランソワ・トリュフォ、



第三回フランス映画祭に来日した「金色の眼の女」のM・ラフォレ

主演ジャンヌ・モロー、オスカー・ヴェルネ、アンリ・セール）、「シベールの日曜日」（監督セルジュ・ブルギニョン、主演ハーディ・クリューガー、ニコール・クールセル）、「金色の眼の女」（監督ジャン・ガブリエル・アルビココ、主演マリー・ラフォレ、ポール・ゲール、フランソワーズ・プレヴォー）、「恋になやむ男」（監督ピエール・エテ、主演ピエール・エテ）、「不滅の女」（監督アラン・ロブ・グリエ、主演ジャック・ドニオル・ヴァルクローズ、フランソワーズ・ブリヨン）、「地下室のメロディー」（監督アンリ・ヴェルヌイ、主演ジャン・ギャバン、アラン・ドロン）、「トブルク行きのタクシー」（監督ドニス・ド・ラ・パトリエール、主演シャルル・アズナヴール、リノ・ヴァンチュラ、ハーディ・クリューガー）、「アメリカの鼠」（監督ジャン・ガブリエル・アルビココ、主演シャルル・アズナヴール、マリー・ラフォレ）の長篇9本に、短篇「ふくろうの河」（監督ロベール・エンリコ、主演ロジェ・ジャッケ）を加えた合計10本で、これに、アルベール・ラモリス、セルジュ・ブルギニョン、フランソワーズ・トリュフォ、アラン・ドロン、マリー・ラフォレ、フランソワーズ・ブリヨン、アレキサンドル・スチュアルトなどが来日した。



さしも広い会場があふれるほど盛況をきわめた第3回「フランス映画祭」来日使節団一行記者会見、於東京商工会議所国際会議場

第4回 フランス映画祭

第4回「フランス映画祭」は、ユニフランス・フィルム主催、フランス大使館、当協会後援により、昭和41年10月11日（火曜日）より同10月15日（土曜日）迄の5日間馬場先門東商ホールに於いて開催された。出品作品は「世界のうた」（監督マルセル・カミュ、主演ハーディ・クリューガー、シャルル・ヴァネル、カトリーヌ・ドヌーヴ）、「戦争は終わった」（監督アラン・レネ、主演イヴ・モンタン、イングリット・チューリン、ジュヌヴィエーヴ・ビュジョルド）、「シンデレラのための罫」（監督アンドレ・カイヤット、主演ダニイ・カレル、マドレーヌ・ロバンソン）、「城の生活」（監督ジャン・ポール・ラブノー、主演カトリーヌ・ドヌーヴ、フィリップ・ノワレ、ピエール・ブラッスール、マリー・マルケ、アンリ・ガルサン）、「ノイローゼ時代」（監督ピエール・エテックス、主演ピエール・エテックス）、「フランスががんばれ」（監督ロベール・デリイ、主演ロベール・デリイ、コレット・ブロッセ）の合計6本で、これにロベール・クラベンス、カトリーヌ・ウインテール、フェリックス・ド・ヴィダス、ユージェヌ・レビシェ、ジャック・カルラン、ジョルジ・ダンシジュール、クロード・ルルーシュ、パスカル・オードル、マリー・フランス・ピジエ、ジャン・ルイ・トランティニャン、ジャック・シャリエなどが来日した。

第4回 フランス映画祭批評旬間

第四回「フランス映画祭批評旬間」は、ユニフラン

ス・フィルム主催、フランス大使館、当協会後援により、昭和41年10月11日（火曜日）から同19日（水曜日）迄の9日間草月会館ホールに於いて開催された。出品作品は「創造物」（監督アニエス・ヴァルダ、主演カトリーヌ・ドヌーヴ、ミシェル・ピツコリ、エヴァ・ダールベック）、「八月のパリ」（監督ピエール・グラニエドフェール、主演シャルル・アズナヴール、スーザン・ハンプシャー）、「第二の真実」（監督クリスチャン・ジャック、主演ミシェール・メルシエ、ロベール・オッセン、ベルナール・ティフェーン）、「墓場からきた男」（監督クロード・ソーテ、主演リノ・ヴァンチュラ、シルヴァ・コツシナ）、「札束と災難」（監督ピエール・グランブラ、主演ジャン・クロード・ブリアリ、マリー・ラフォレ、ソフィー・ドーミエ）、「バルタザールが、ゆきあたりばったり」（監督ロベール・ブレッソン、主演アンヌ・ヴィアゼンスキ）、「テルエルの恋人たち」（監督レイモン・ルーロー、主演リュドミラ・チェリーナ）、「長い道のり」（監督アレクサンドル・アストリュツク、主演ロベール・オッセン、モーリス・ロネ、ジャン・ルイ・トランティニャン）、「地獄列車」（監督ジル・グランジェ、主演ジャン・マレー、マリサ・メルリ、ハワード・ヴェルノン）、「山師トマ」（監督ジョルジュ・フランジュ、主演エマニュエル・リヴァ、ジャン・セルヴェ、ファブリス・ルーロー）、「ニューヨークのお巡りさん」（監督ジャン・ジロー、主演ルイ・ド・フェネス）、「無傷な心」（監督エドワール・ル



第4回「フランス映画祭」来日使節団一行の歓迎パーティ

ンツ),「獅子のたてがみ」(監督アンリ・ヴェルヌイユ,主演ジャン・クロード・ブリアリ,クラウド・カルディナーレ,ダニエル・ダリユー,ミシェル・モルガン),「天使の友情」(監督ジャン・ドラノワ,主演ディディエ・オードパン),「マックス・ランデとともに」(監督モオ・マックス・ランデ,主演マックス・ランデ),「アルファヴィル」(監督ジャン・リュック・ゴダール,主演アンナ・カリーナ,エディー・コンスタンチヌ),「アメリカの鼠」(監督ジャン・ガブリエル・アルビコッコ,主演シャルル・アズナヴール,マリー・ラフォレ),「四つの真実」(監督ルネ・クレール,エルヴェ・ブロンベルジェ,ルイス・ベランガ,アレッサンドロ・ブラゼッティ,主演シャルル・アズナヴール,レスリー・キャロン,アンナ・カリーナ),「暴力三昧」(監督ロベール・オッセン,主演ロベール・オッセン,ジョヴァンナ・ラツリ),「気狂いピエロ」(監督ジャン・リュック・ゴダール,主演アンナ・カリーナ,ジャン・ポール・ベルモンド),「グラン・レストラン」(監督ジャック・ベナール,主演ルイ・ド・フュネス,ベルナール・ブリエ),「五角関係」(監督ジャック・ポワトルノー,主演ロジェ・アンナ,シルヴァ・コシッナ),「老婆らしからぬ老婆」(監督ルネ・アリオ,主演シルビ・マルカ・リボヴスカ),「男性・女性」(監督ジャン・リュック・ゴダール,主演ジャン・ピエール・レオー,シャンタール・ゴヤ)の合計24本だった。

ソビエト映画祭



第2回 ソビエト映画祭



「戦争と平和」の公開を記念して来日したセルゲイ・ボンダルチュク監督一行歓迎パーティ, 於・東商スカイルーム

第2回「ソビエト映画祭」は、ソ連大使館主催、ソ連映画輸出入公団、社団法人日本映画製作者連盟、当協会後援、日本海貿易株式会社協賛により、昭和39年10月26日(月曜日)から同10月30日(金曜日)迄の5日間有楽町読売ホール及び新潟松竹大竹劇場に於いて開催された。出品作品は「アパショナータ」(監督ユーリイ・ヴィシンスキー,主演ボリス・スミルノフ,ヴラジーミル・エメリヤノフ),「怒りと響きの戦場」(監督アレクサンドル・ストルペル,主演キリール・ラヴロフ,アナトリー・パパーノフ),「白いキャバン」(監督エリダル・シエンゲラヤ,主演アリアドナ・シエンゲラヤ,イメーダ・カヒアニ),「私はモスクワを歩く」(監督ゲオルギー・ダネリア,主演ガリーナ・ポリスキーフ,アレクセイ・ロクテフ),「ハムレット」(監督グリゴリー・コージンツェフ,主演イノケンティ・スモクトウノフスキー,アナスターシア・ヴェルティンスカヤ)の長篇5本に、短篇「ゼラフシャンでの偉業」(監督ゼ・トウゾワ),「冬の組曲」(監督ヴェ・サドフスキー)の2本を加えた合

計7本で、これにセルゲイ・スミルノフ、アナトーリ・パパーノフ、アリアードナ・シェンゲラーヤなどが来日した。

「戦争と平和」主演女優サベリェフさんを囲んでカメラに収めた左から古川日本ヘラルド映画社長、堀日活社長、サベリェフさん、コーシキンソ連映画輸出入公団駐日代表



第3回 ソビエト映画祭

第3回ソビエト映画祭は、ソ連大使館主催、ソ連映画輸出入公団、社団法人日本映画製作者連盟、当協会後援、日本海貿易株式会社協賛により、昭和40年10月20日（月曜日）から同10月29日（水曜日）迄の7日間東京虎の門ホール、大阪フェスティバルホール、広島朝日会館に於いて開催された。出品作品は「オーロラ号の砲撃」（監督ユーリー・ビシンスキー、主演キリール・ラブロフ、ミハイル・クズネツォフ）、「華麗なるバレエ」（監督レオニード・ラブロフスキー、アレクサンドル・シェレンコフ）、「戦火を越えて」（監督レーゾ・チヘイゼ、主演セルゴ・ザガリアーゼ、ケテワン・ボチョリシビーリ）「僕はパパを買った」（監督イリヤ・フレーズ、主演アリョーシャ・ザゴルスキー、オリガ・ルイセンコ、ヴラジーミル・トレシチャロフ）、「大祖国戦争」（監督ロマン・カルメン、イリーナ・ベンジェリ、イリーナ・セートキナ）の長篇5本に、「ふたり」（監督ミハイル・ボーギン、主演ビクトリヤ・フォードロワ、ワレンチン・スミルニッキー）、「すみれをつけたおばさん」（監督パーベ

ル・リュービモフ、主演ニーナ・サゾーノワスベトラーナ、スベトラーナ・スベトリチナヤ、ヴラジーミル・イワショフ）、「結婚」（監督ミハイル・コバヒーゼ、主演ゴギー・カフタラーゼ、ナナ・カフタラー



「戦争と平和」関係者の歓迎パーティで
欲談するV・チーホノフ氏と倍償千恵子

ゼ）の短篇3本を加えた合計8本で、これにアレクサンドル・フィリッポフ、セルゴ・ザガリアーゼなどが来日した。

第4回 ソビエト映画祭

第4回「ソビエト映画祭」は、ソ連大使館主催、ソ連映画輸出入公団、社団法人日本映画製作者連盟、当協会後援、日本海貿易株式会社協賛により、昭和41年10月25日（火曜日）から同11月2日（水曜日）迄の7日間東京サンケイホール、京都勤労会館、福岡電気ホールに於いて開催された。出品作品は「ポーランドのレーニン」（監督セルゲイ・ユトケービッチ、主演マクシム・シュトラウフ、アンナ・リシャンスカヤ）、「忘れられた祖先の影」（監督セルゲイ・パラジャノフ、主演イワン・ミコライチュク、ラリサ・カドーチニコワ）、「父と子と」（監督ミハイル・エルショフ、主演エフゲニー・マトベーエフ、ビヤ・アルトマネ）の長篇3本に、短篇「七つのソビエトの歌」（監督エス・ライトブルト）、「熊のサーカス」（監督エカテリーナ・ベルミーシェワ）、「少年の犬」（監督テングス・ゴシャーゼ）の3本を加えた合計6本で、これにセルゲイ・ミハルコフが来日した。

第5回 ソビエト映画祭

第5回「ソビエト映画祭」は、ソ連大使館主催、ソ連映画輸出入公団、社団法人日本映画製作者連盟、当協会後援、日本海貿易株式会社協賛により、昭和42年12月12日（火曜日）から同12月26日（火曜日）迄の7日間東京九段会館、札幌道新ホール、神戸海員会館に於いて行われた。出品作品は「ジャーナリスト」（監督セルゲイ・ゲラーシモフ、主演ユーリー・ワシーリェフ、ガリーナ・ポリスキーフ）、「密使」（監督ステパン・ケボルコフ、エラズム・カラミヤン、主演グルゲン・トヌンツ、アナトリー・ファルコビッチ）、「ゾーシャ」（監督ミハイル・ボーギン、主演ポーラ・ラクサ、ユーリー・カモールヌイ）の長篇3本に、短篇「シベリヤの冬」（監督ベ・ホミャコフ）「山を降りるシラリ爺さん」、「モスクワ郊外のシンフォニー」（監督エヌ・プロゾロフスキー）の3本を加えた合計6本で、これにレフ・アレクサンドロビッチ・クリジャーノフ、ミハイル・ボーギン、ガリーナ・ポリスキーフなどが来日した。

「戦争と平和」関係者一行歓迎レセプションで挨拶をするセルゲイ・ボンダルチュク監督



第一回「スウェーデン映画祭」の開会式

スウェーデン映画祭



第1回「スウェーデン映画祭」は、スウェーデン・フィルム・インスティテュート主催、スウェーデン大使館、当協会後援により、昭和41年11月14日（月曜日）から同11月19日（土曜日）迄の6日間馬場先門東商ホールに於いて開催された。出品作品は「ざりがに合戦」（監督ターゲ・ダニエルソン、主演モニカ・ゼッターランド、ブリギッタ・アンデルソン）、「貧民街」（監督ボー・ビーダーバーク、主演トミー・ベルグレン、ケーベ・イエールム）、「夜のたわむれ」（監督マイ・ゼッターリング、主演イングリット・トゥリーン、レナ・ブランディンヌ）、「罪」（監督ラース・ゲルリング、主演スベン・バーティル・トープ、ヘレナ・ブロディン）、「逃亡兵」（監督ハンス・アブラムソン、主演クリスチナ・スコーリン、ハリエット・アンダーソン）、「愛する人々」（監督マイ・ゼッターリング、主演ハリエット・アンダーソン、グネル・リンドブロム、ジオ・ペトレ）、「暗黒の女」（監督アルネ・マットソン、主演グネル・リンドグロム、ヨスタ・エクマン）、「飢え」（監督ヘニング・カールセン、主演ペル・オスカーソン、グネル・リンドブロム）の合計8本で、これにハリエット・アンデルソン、レナ・グランハーゲン、モニカ・セットロンド、ハリー・シャイーン、トーレ・オロフ・ショーベルイなどが来日した。

▶第一回「スウェーデン映画祭」使節団



✿ イタリア映画祭



第三回「イタリア映画祭」に来日したクラウディア・カルデナーレと三船敏郎

第3回「イタリア映画祭」は、ユニタリア・フィルム主催、イタリア大使館、社団法人映画産業団体連合会、財団法人日本映画海外普及協会、当協会後援により、昭和39年3月4日(水曜日)から同3月12日(木曜日)迄の8日間馬場先門東商ホール及びスカラ座に於いて開催された。出品作品は「都会を動かす手」

(監督フランチェスコ・ロージ、主演ロッド・スタイガー、サルボ・ランドネ)、「皇帝のビーナス」(監督ジャン・ドラノア、主演ジーナ・ロロブリジダ、レーモン・ベルグラン)、「砂上物語」(監督リカルド・フェリーニ、主演フランチェスカ・デ・セータ、アンナ・オルソ)、「墮落」(監督マウロ・ボロニーニ、主演ロザンナ・スキヤフィーノ、アラン・キューニ)、「ベロナの裁判」(監督カルロ・リツァーニ、主演シルバーナ・マンガノ、フランク・ウォルフ)、「訪問」(監督アントニオ・ピエトランジェリ、主演サンドラ・ミーロ、フランソワ・ペリエ)、「家族日誌」(監督バレオ・ズルリーニ、主演マルチェロ・マストロヤンニ、ジャック・ペラン)、「誘惑されて、棄てられた女」(監督ピエトロ・ジエルミ、主演ステファニア・サンドレリ、アルド・プグルシイ)、「ブーベの女」(監督ルイジ・コメンチーニ、主演クラウディア・カルデナーレ、ジョージ・チャキリス)の合計9本で、これにジーナ・ロロブリジダ、ロザンナ・スキヤフィーノ、クラウディア・カルデナーレ、アントニオ・ピエトランジェリなどが来日した。

✿ ドイツ映画祭

第1回「ドイツ映画祭」は、西ドイツ映画産業輸出連盟主催、外務省、在日西ドイツ大使館、日本映画製作者連盟、日本映画海外普及協会、当協会後援により、昭和



第3回「イタリア映画祭」に来日したジーナ・ロロブリジダと川喜多会長。

34年11月25日(水曜日)から30日(月曜日)迄の6日間、京橋テアトル東京に於いて開催された。出品作品は、「グランド・ホテル」(監督ゴットフリート・ラインハルト、主演O・W・フィッシャー、ミシェル・モルガン)、「死の船」(監督ゲオルグ・トレスラー、主演ホルスト・ブーフホルツ、マリオ・アドルフ)、「泥沼に生きる」(監督ヴィクター・ヴィカス、主演ジュリエッタ・マシーナ、カール・ラダッツ)、「美しき冒険」(監督クルト・ホフマン、主演リゼロッテ・プルファー、ロベルト・グラーフ)、「最後の沈黙」(監督ヘルムト・コイトナー、主演ハディ・クリューガー、ペーター・ファン・アイク)、「橋」(監督ベルンハート・ヴィッキ、主演フォルカー・ボーナー、フリッツ・ウェッパー)の長篇6本に、短篇「ベルリン問題」、「アルミニウム」、「裸の朝」、「小さなサーカス」、「世界がベルリンを作る」、「北海の干潟」の6本を加えた合計12本で、これにギュンター・シュワルツ、リゼロッテ・プルファー、アンチエ・ゲールク、エファ・インゲボルグ・ショルツ、ルース・ニーハウス、トニー・ザイラー、(スター)、ベルンハルト・ヴィツキー(監督)などが来日した。

＜優秀外国映画輸入配給賞＞ の実施

「優秀外国映画輸入配給賞」は、当協会が年間を通じて行っている最も重要な行事の一つで、現在まで五回通商産業省の後援を得て実施されている。

これは毎年4月1日から翌年3月31日迄の1ヶ年間に、作品的に優秀で、なおかつ新分野を開拓し、日本映画の発展に大きく寄与すると認められた外国映画を我が国に輸入公開した配給会社を表彰するもので、審査は通商産業省企業局商務第2課長、加盟各社宣伝部

■＜優秀外国映画輸入配給賞＞授賞会社一覧表

第1回・昭和37年('62)

第2回・昭和38年('63)



特別賞



授賞式

上映映画

東和株式会社

日本ヘラルド映画株式会社

コロムビア映画会社

東和株式会社



昭和38年4月30日<火>
ヤマハホール

昭和39年4月30日<木>
東商ホール

東和株式会社提供
＜5時から7時までのクレオ＞

日本ヘラルド映画株式会社提供
＜昨日・今日・明日＞



■実 施

第1回「優秀外国映画輸入配給賞」
昭和37年度(第1回)「優秀外国映画輸入配給賞」は、昭和38年2月7日(木曜日)及び同4月14日(木曜日)の2回

第2回「優秀外国映画輸入配給賞」
昭和38年度(第2回)「優秀外国映画輸入配給賞」は、昭和39年1月16日(木曜日)及び同2月12日(水曜日)並びに

長，当協会事務局長を構成メンバーとする「運営委員会」が広く各界に委嘱した審査員によって行われており，審査の結果決定した最高賞に対し，通商産業大臣の表彰状，記念品が送られる他，審査員会の決定により特別賞を獲得したところに対し，当協会の表彰状，記念品が送られるわけで，最高賞を獲得した会社は授賞式の当日に手持ちの作品（原則として未封切りに限る）の特別招待試写会の便宜を計ることになっている

第3回・昭和39年('64)

東和株式会社

日本ユナイテッド・アーチスツ
映画会社

ユナイットの表彰状は，ニューヨーク本社にあるため，掲蔵きでませんでした

昭和40年4月16日<金>
東商ホール

東和株式会社提供
<頭上の脅威>



第3回「優秀外国映画輸入配給賞」
昭和39年度（第3回）「優秀外国映画輸入配給賞」は，昭和40年2月12日（金曜日）及び同3月10日（水曜日）の2

第4回・昭和40年('65)

株式会社 日本アート・シアター・ギルド

ウォルト・ディズニー
映画株式会社



昭和41年4月18日<月>
東商ホール

株式会社
日本アート・シアター・ギルド提供
<青春の記録>



第4回「優秀外国映画輸入配給賞」
昭和40年度（第4回）「優秀外国映画輸入配給賞」は，昭和41年2月11日（金曜日）及び3月7日（水曜日）の2回

第5回・昭和41年('66)

日本ヘラルド映画株式会社

松竹映配株式会社
株式会社
日本アート・シアター・ギルド



昭和42年4月13日<木>
東商ホール

日本ヘラルド映画株式会社提供
<気狂いピエロ>



にわたって開かれた審査員会に於いて、相羽堯（西日本新聞東京支社），大橋恭彦（「映画芸術」編集長），岡俊雄（映画評論家），荻昌弘（映画評論家），草壁久四郎（毎日新聞学芸部），島崎清彦（社団法人日本映画技術協会常務理事），角田敏夫（「スクリーン」編集長），園崎昌勝（朝日新聞企画部），辻維文（京都新聞東京支社），戸川エマ（文化学院教授），南部僑一郎（映画評論家），橋本弘（東京中日新聞文化部），藤原剋（内外タイムス文化部），吉田晴雄（日本経済新聞文化部），淀川長治（映画評論家）の合計15氏によって慎重に行われた結果，同年度は，「野いちご」，「尼僧ヨアンナ」，「アレキサンドル・ネフスキー」，「夜」，「イタリア式離婚狂想曲」，「世界残酷物語」等本賞の主旨に沿う作品を最も多く輸入配給した東和株式会社に通産大臣賞，「アラビアのロ



レンス」の輸入配給により70ミリ映画の将来に画期的な一石を投じたコロムビア映画会社に特別賞をそれぞれ贈ることに決定した。

尚，これによる受賞式及び記念試写会は，同4月30日（火曜日）ヤマハホールに於いて行われ，社団法人外国映画輸入配給協会会長川喜多長政氏の挨拶，審査委員長映画評論家淀川長治氏の審査経過説明，通産大臣福田一氏の祝辞がすんでから，表彰状，記念品がそれぞれ当該会社代表に贈られ，花束贈呈に引き続き，受賞会社を代表して東和株式会社取締役社長川喜多長政，コロムビア映画会社日本代表ジュリアン・D・バーマン両氏から謝辞が述べられ，休憩の後，東和株式会社提供の「5時から7時までのクレオ」（監督アニェス・バルダ，主演コリンヌ・マルシャン，アントワヌ・ブルセイユ）を上映した。

同2月18日（水曜日）の3回にわたって開かれた審査員会に於いて，大橋恭彦（「映画芸術」編集長），岡俊雄（映画評論家），荻昌弘（映画評論家），草壁久四郎（毎日新聞学芸部），島崎清彦（社団法人日本映画技術協会常務理事），角田敏夫（「スクリーン」編集長），園崎昌勝（朝日新聞企画部），高畠二郎（北海道新聞東京支社），田村英夫（東京タイムス文化部），辻維文（京都新聞東京支社），戸川エマ（文化学院教授），南部僑一郎（映画評論家），橋本弘（東京中日新聞文化部），吉田晴雄（日本経済新聞文化部），淀川長治（映画評論家）の合計15氏によって慎重に行われた結果，同年度は，「チコと鯨」，「ぼくの伯父さんの休暇」，「禁じられた恋の島」，「女と男のいる舗道」，「カラバゴス」，「突然炎の如く」等本賞の主旨に沿う作品を最も多く輸入配給した日本ヘラルド映画株式会社に通産大臣賞，「奇蹟の人」を輸入公開した努力，驚異的な興行成績に対し東和株式会社に特別賞をそれぞれ贈ることに決定した。尚，これによる受賞式及び記念試写会は，同4月30日（木曜日）東商ホールに於いて行われ，社団法人外国映画輸入配給協会常務理事曾我正史氏の挨拶，審査委員長映画評論家淀川長治氏の審査経過説明，通産大臣企業



局長島田喜仁氏の祝辞がすんでから，表彰状，記念品がそれぞれ当該会社代表に贈られ，花束贈呈に引き続き，受賞会社を代表して日本ヘラルド映画株式会社常務取締役広江春広，東和株式会社専務取締役工藤明両氏から謝辞が述べられ，休憩の後，日本ヘラルド映画株式会社提供の「昨日・今日・明日」（監督ヴィットリオ・デ・シーカ，主演ソフィア・ローレン，マルチェロ・マストロヤンニ）を上映した。

回にわたって開かれた審査員会に於いて、荻昌弘（映画評論家）、加東康一（「映画情報」編集長）、小菅春雄（産経新聞教養部）、古波蔵保好（毎日新聞出版局参与）、佐藤美子（声楽家）、嶋地孝磨（「キネマ旬報」編集長）、角田敏夫（「スクリーン」編集長）、高畠二郎（北海道新聞東京支社）、田村英夫（東京タイムス芸能部）、辻維文（京都新聞東京支社）、登川直樹（映画評論家）、花村禎次郎（社団法人日本映画技術協会）、林玉樹（読売新聞娯楽部）、日高真也（サンケイスポーツ教養部）、双葉十三郎（映画評論家）、淀川長治（映画評論家）、渡辺静夫（「マドモアゼル」編集部）の合計17氏によって慎重に行われた結果、同年度は、「去年マリナーズで」、「沈黙」、「かくも長き不在」、「ピリディアナ」、「シェルブールの雨傘」、「バサジェルカ」、「リサの瞳のなかに」、「ハムレット」、「送られなかった手紙」、「わかれ道」等本賞の主旨に沿う作品を最も多く輸入配給した東和株式会社に通産大臣賞、映画の持つ重要な要素の1つである健全な娯楽性を備えていた「007/危機一発」、「トム・ジョーンズの華麗な冒険」、「大列車作戦」、「トプカピ」等を輸入配給した日本ユニテッド・アーチスト映画会社に特別賞をそれぞれ贈ることに決定した。

尚、これによる受賞式及び記念試写会は、同4月16日（金曜日）東商ホールに於いて行われ社団法人外国映画輸入配給協会会長川喜多長政氏の挨拶、審査委員長淀川長治氏の審査経過説明、通産産業省企業局長島田喜仁氏の祝辞がすんでから、表彰状、記念品がそれぞれ当該会社代表に贈られ、花束贈呈に引き続き、受賞会社を代表して東和株式会社副社長工藤明、日本ユニテッド・アーチスト映画会社代表エドガー・H・カーナー両氏から謝辞が述べられ、休憩の後、東和株式会社提供の「頭上の脅威」（監督イブ・シャンピ、主演アンドレ・スマック、マルセル・ボズフィ）を上映した。



にわたって開かれた審査員会に於いて、上田正二（夕刊フクニチ新聞東京支社文化部）荻昌弘（映画評論家）、加東康一（「映画情報」編集長）、小菅春雄（産経新聞教養部）、古波蔵保好（毎日新聞出版局参与）、佐藤美子（声楽家）、嶋地孝磨（「キネマ旬報」編集長）、角田敏夫（「スクリーン」編集長）、辻維文（京都新聞東京支社）、登川直樹（映画評論家）、花村禎次郎（社団法人日本映画技術協会）、林玉樹（読売新聞娯楽部）、日高真也（サンケイスポーツ教養部）、深沢哲也（報知新聞文化部）、双葉十三郎（映画評論家）、淀川長治（映画評論家）、渡辺静夫（「マドモアゼル」副編集長）の合計17氏によって慎重に行われた結果、同年度は、「野望の系列」、「孤独の報酬」、「道化師の夜」、「小犬を連れた貴婦人」、「戦争の真の終り」、「8½」等本賞の主旨に沿う作品を最も多く輸入配給した株式会社日本アート・シアター・ギルドに通産大臣賞、映画の持つ重要な要素の1つである健全な家庭性、大衆娯楽性と芸術性を備えていた「メリー・ポピンズ」を輸入配給したウォルト・ディズニー映画株式会社に特別賞をそれぞれ贈ることに決定した。

尚、これによる受賞式及び記念試写会は、同4月18日（月曜日）東商ホールに於いて行われ、社団法人外国映画輸入配給協会会長川喜多長政氏の挨拶、審査委員長映画評論家淀川長治氏の審査経過説明、通産産業省企業局長島田喜仁氏の祝辞がすんでから、表彰状、記念品がそれぞれ当該会社代表に贈られ、花束贈呈に引き続き、受賞会社を代表して株式会社アート・シアター・ギルド取締役社長井関種雄、ウォルト・ディズニー映画会社代表取締役石川俊重両氏から謝辞が述べられ、休憩の後、株式会社日本アート・シアター・ギルド提供の「青春の記録」（監督ジャン・ヴィットリオ・バルディ、ジャン・ルーシュ、勅使河原宏、ミシェル・ブロー、主演ミカエル・エズドラ、ヴェロニック・デュヴァル、入江美樹、ジュスヴィエーブ・ピュジョルド）を上映した。

第5回「優秀外国映画輸入配給賞」

昭和41年度（第5回）「優秀外国映画輸入配給賞」は、昭和42年2月17日（金曜日）及び同3月8日（水曜日）の2回にわたって開かれた審査員会に於いて、大黒東洋士（映画評論家）、大森敦博（西日本新聞東京支社）、岡俊雄（映画評論家）、尾河照三（「スクリーン」編集長）、荻昌弘（映画評論家）、押川義行（日刊スポーツ文化部）、小田切一雄（文芸春秋社「漫画読本」編集部）、加東康一（「映画情報」編集長）、佐藤重臣（「映画評論」編集長）、品田雄吉（映画評論家）、辻維文（京都新聞東京支社）、戸川エマ（文化学院教授）、深沢哲也（報知新聞文化部）、村山祥邦（東京新聞文化部）、淀川長治（映画評論家）の合計15氏によって慎重に行われた結果、同年度は、「国境は燃えている」、「幸福」、「戦争と平和」等本賞



の主旨に沿う作品を最も多く輸入配給した日本ヘラルド映画株式会社に通産大臣賞、映画の持つ重要な要素の1つである芸術性に新境地を導入した「アルジェの戦い」、「大地のうた」の公開実現に努力した松竹映配株式会社、株式会社日本アート・シアター・ギルドに特別賞をそれぞれ贈ることに決定した。尚、これによる受賞式及び記念試写会は、同4月13日（木曜日）東商ホールに於いて行われ、社団法人外国映画輸入配給協会会長川喜多長政氏の挨拶、審査委員長映画評論家淀川長治氏の審査経過説明、通産産業省企業局次長下山佳雄氏の祝辞がすんでから、表彰状、記念品がそれぞれ当該会社代表に贈られ、花束贈呈に引き続き、受賞会社を代表して日本ヘラルド映画株式会社取締役社長古川勝己、松竹映配株式会社取締役社長城戸四郎、株式会社日本アート・シアター・ギルド取締役社長井関種雄氏から謝辞が述べられ、休憩の後、日本ヘラルド映画株式会社提供の「気狂いピエロ」（監督ジャン・リュック・ゴダール、主演ジャン・ポール・ベルモンド、アンナ・カリーナ）を上映した。



＜外国映画展の開催＞

「外国映画展」は、「優秀外国映画輸入配給賞」と共に、当協会が年間を通じて行っている大きな行事の一つで、現在まで6回通商産業省の後援を得て実施されている。

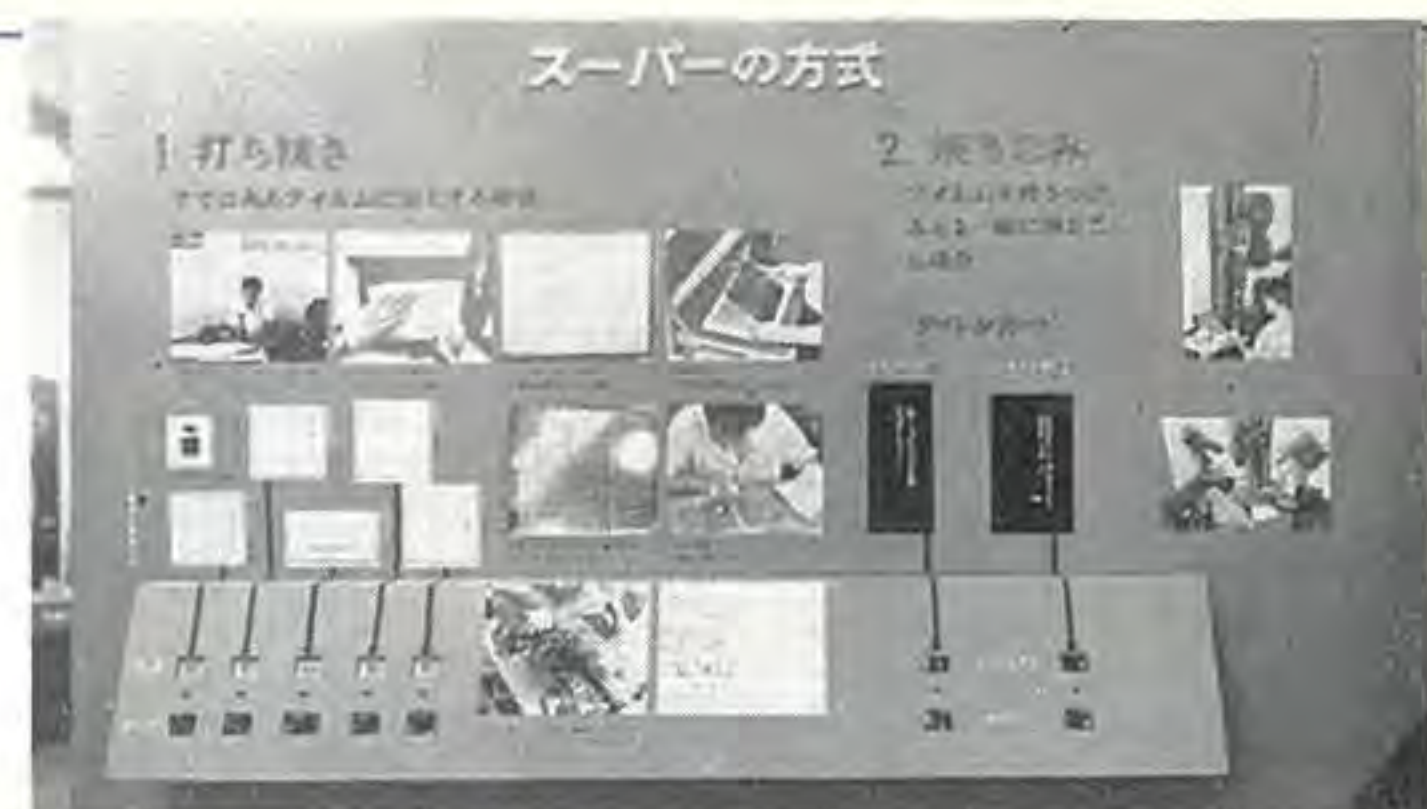
これは映画が大衆娯楽として国民生活に不可欠の要素を占めている現状に鑑み、我が国に於ける唯一の外国映画輸入配給業者の団体である当協会傘下の各社が、開催時期から半年後にかけて公開する予定の代表作の展示を通じて、映画が一般社会に与える影響を考慮して質的に優秀な映画の鑑賞を奨めると共に、新しい映画の技術を参考に供し、併せて外国映画の輸入配給業務に関連する諸問題を紹介することによって、映画をレジャー産業の一環として幅広く取り上げ、総合的に映画界の一大デモンストレーション的效果を盛り上げる事を目的としたもので、日本橋三越で3回、新宿伊勢丹で2回、新宿京王で1回それぞれ開催されている。



第1回「外国映画展」

昭和37年9月18日（火曜日）から同23日（日曜日）まで日本橋三越に於いて当協会主催、大映、映配、イタリフィルム、日本ヘラルド映画、大蔵映画、昭映フィルム、松竹国際、新外映配給、東和9社の協賛、通商産業省の後援を得て開催された。

出品作品は、大映「喰いついたら殺すな」（監督ジョン・ギラーミン、主演リチャード・トッド、ピーター・セラーズ）、天然色「ダイナマイト・ジャック」（監督ジャン・バステリア、主演エレオノラ・パルガ

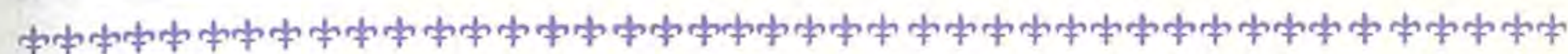


ス、アドリエン・コリ）、映配「アパッチ砦」（監督ジョン・フォード、主演ジョン・ウェイン、ヘンリー・フォンダ）、天然色「西部の王者」（監督ウィリアム・ウェルマン、主演ジョエル・マックリー、モーリン・オハラ）、イタリフィルム天然色「ヒマラヤK2征服」（監督マルチェロ・バルディ、長篇記録映画）「ウンベルトD」（監督ヴィットリオ・デ・シーカ、主演カルロ・バッティスティ、マリア・ピア・カジリオ）日本ヘラルド映画「レッツ・ゴー物語」（監督フレディ・フランシス、主演ジョージ・チャキリス、ジャネット・スコット）、「太陽はひとりぼっち」（監督ミケランジェロ、アントニオーニ、主演アラン・ドロモン、モニカ・ヴィッティ）、大蔵映画天然色「海女の怪真珠」（監督小林悟、主演泉京子、梅若正二）、天然色「魅惑の夜曲」（短篇記録映画）、昭映フィルム「蜜の味」（監督トニー・リチャードソン、主演ドラ・ブライアン、リタ・トゥシンハム）、「怒りの葡萄」（監督ジョン・フォード、主演ヘンリー・フォンダ、ジェーン・ダーウェル）、松竹国際映画「暴力行為」（監督ホセ・M・フォルケ、主演リチャード・モルセ・マーベル・カルル）、「雨の夜の銃声」（監督ヘルムート・コイトナー、主演エリック・シューマン、エバ・コットハウス）、新外映配給「黙って抱いて」（監督マルク・アレグレ、主演ミレヌ・ドモンジョ、アラン・ドロモン）、「ならず者」（監督ハワード・ヒューズ、主演ジェーン・ラッセル、ジャック・ビューテル）東和「夜」（監督ミケランジェロ・アントニオーニ、主演ジャンヌ・モロー・マルチェロ・マストロヤンニ）、天然色「世界残酷物語」（監督グアルティエロ・ヤコベッティ、長篇記録映画）計18本で、特集として「外国映画の輸入から封切まで」が披露された。

これは佐々木プロダクションズ、テトラ工芸社、東京現像所、東洋現像所、日本シネアーツ社、横浜シネマ現像所の協力によるもので、外国映画は到着するとすぐ宣伝にかかって、封切りというわけではなく税関で面倒な手続きを経て、輸入通関し、その上で日本語のスーパーインポーズを入れなければならない、それが出来ると、今度は予告篇を制作し、やっと公開になる



第2回・スナップ



という、いわばスーパーインポーズはどうして出来るか、予告篇はどうして出来るか、こうした封切以前の「陰の苦勞」といったものをわかりやすく解説したわけだが、実物見本を多数展示したことも手伝いたいへん好評だった他、九月十九日（水曜日）に三越劇場で「遊んだだけよ」（東和）の特別試写会が開かれた。

第2回「外国映画展」

昭和38年4月17日（月曜日）から同22日（土曜日）まで日本橋三越に於いて当協会主催、大映、日本ヘラルド映画、大蔵映画、新外映配給、松竹映配、昭映フィルム、東京第一フィルム、東急文化会館、東和9社の協賛、通商産業省の後援を得て開催された。

出品作品は、大映天然色「あしやからの飛行」（監督マイケル・アンダーリン、主演ユル・ブリンナー、リチャード・ウィドマーク）、「コレヒドール戦記」（監督ジョン・フォード、主演ジョン・ウェイン、ロバート・モンゴメリー）、日本ヘラルド映画天然色「ソドムとゴモラ」（監督ロバート・アルドリッチ、主演スチュアート・グレングジャー、アヌーク・エイメ）、「女と男のいる舗道」（監督ジャン・リュック・ゴダール、主演アンナ・カレーナ、サディ・ルポット）、「突然炎のごとく」（監督フランソワ・トリュフォー、主演ジャンヌ・モロー、オスカー・ヴェルネル）、大蔵映画「性の敵」（監督ジェラルド・オハラ、主演マーガレット・ローズ・キール、ディヴィッド・ウェストン）、新外映配給「火刑の部屋」（監督ジュリアン・デュビビエ、主演ナージャ・テイラー、ジャン・クロード・ブリアリ）、「野性の収獲」（監督ジェリー・A・バエルウィッツ、主演ドロレス・フェイス、ディーン・フレデリクス）、松竹映配天然色「シェラザード」（監督ピエール・ガスパールニユイ、主演アンナ・カレーナ、ジェラルド・バレー）、「女王蜂」（監督マルコ・フェレリ、主演ウーゴ・トニャッツィ、マリナ・ブラディ）、「夕焼けの戦場」（監督ベリコ・ブライッチ、主演ベルト・ソトラル、オリベラ・マルコビッチ）、昭映フィルム「長距離ランナーの孤独」（監督トニー・リチャードソン、主演トム・コートニーネ

イ、アビス・バネージ）、東京第一フィルム天然色「太陽は傷だらけ」（監督クリスチャン・マルカン、主演ロベール・オッセン、レナート・サルヴァトーリ）天然色「砂上物語」（監督リカルド・フェリーニ、主演フランチェスカ・デ・セータ、アンナ・オルソ）東急文化会館「悪いやつ」（監督チャールズ・ハス、主演スティーブ・コークラン、マミー・バン・ドールン）、東和「奇跡の人」（監督アーサー・ペン、主演アン・バンクロフト、パティ・デューク）、「三文オペラ」（監督ヴォルフガング・シュタウテ、主演クルト・ユルゲンス、ヒルデガート・クネフ）、「審判」（監督オーソン・ウェルズ、主演アンソニー・パーキンス、ジャンヌ・モロー）計18本で、特集として我が国の文化、風俗に大きな影響をもたらした「ヨーロッパ映画の歩み」を「シネ・モード」（青江耿介氏監修）、「スクリーン・ミュージック」（野口久光氏監修）、「来日主要監督、スターのポートレート及びスナップの展示」、「各界有名人の選んだお好みヨーロッパスターのベスト・テン」の4コーナーに分けて実施した。これはキングレコード、日本コロムビア、日本グラモフォン、日本ビクター、テイチク、東芝音楽工業、映画の友、ユニフランス・フィルム、ユニタリア・フィルムの協力によるもので、なかでも各界有名人の選んだお好みヨーロッパスターのベスト・テンは、由原木七朗氏の似顔絵なども織りまぜたため、多大の興味を集めた他9月19日（木曜日）三越劇場で「ヨーロッパ映画の歩み」特集記念特別回顧として「年上の女」（東和）、「死刑台のエレベーター」（松竹映配）が特別上映され、映画評論家清水晶氏が講演した。

第3回「外国映画展」

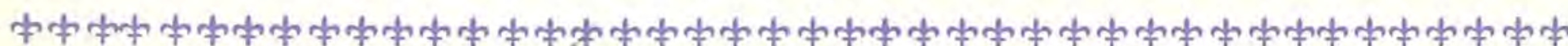
昭和39年6月23日（火曜日）から同28日（日曜日）まで日本橋三越に於いて当協会主催、大映、日本ヘラルド映画、大蔵映画、松竹映配、昭映フィルム、東京第一フィルム、東急文化会館、東和、ヨーロッパフィルム9社の協賛通商産業省の後援を得て開催された。

出品作品は、大映天然色「バストで勝負」（監督マリオ・カメリーニ、主演ソフィア・ローレン、マルチ

第4回・展



第3回・展



エロ・マストロヤンニ), 「ペリカンと少年」(監督ボリス・ドーリン, 主演ウォロジャ・アゲエフ, D・ジャコフ), 日本ヘラルド映画天然色「家族日誌」(監督ヴァレリオ・ズルリーニ, 主演マルチェロ・マストロヤンニ, ジャック・ペラン), 天然色「ゼロの世代」(監督パオロ・カバラ, 長篇記録映画), 天然色「昨日・今日・明日」(監督ヴィットリオ・デ・シーカ, 主演ソフィア・ローレン, マルチェロ・マストロヤンニ), 大蔵映画「女体入門」(監督ヴァル・ゲイスト, 主演ローレンス・ハーヴェイ, シルヴィア・シムズ) 松竹映配天然色「フリッパー」(監督ジェームス・B・クラーク, 主演チャック・コナーズ, ルーク・ハルピン), 天然色「恋のなごさ」監督フロレスターノ・バンチーニ, 主演カトリーヌ・スパーク, ジャック・ペラン), 「ブーベの恋人」(監督ルイジ・コメンチーニ, 主演クラウディア・カルディナーレ, ジョージ・チャキリス), 昭映フィルム「鏡の中にある如く」(監督イングマル・ベルイマン, 主演ハリエット・アンデルソン, グンナール・ビヨルンストランド), 東京第一フィルム「墮落」(監督マウロ・ボロニーニ, 主演ジャック・ペラン, ロザンナ・スキヤフィーノ) 天然色「誰がために鐘は鳴る」(監督サム・ウッド, 主演ゲイリー・クーパー, イングリッド・バーグマン), 東急文化会館「誘惑の海」(監督ジョヴァン・シヴァノビッチ, 主演ピーター・ヴァン・アイク, エルケ・ソマー), 東和天然色「サミー南へ行く」(監督アレクサンダー・マッケンドリック, 主演ファergus・マクリーランド, エドワード・G・ロビンソン), 天然色「シェルブールの雨傘」(監督ジャック・ドミエ, 主演カトリーヌ・ドヌーブ, ニーノ・カステルヌオーボ), 天然色「スエーデンの城」(監督ロジェ・バディム, 主演モニカ・ビッティ, ジャン・クロード・ブリアリ), ヨーロッパフィルム「裏切り」(監督ヘルバート・ライネッカー, 主演ハーディ・クリューガー, マルチン・ヘルト), 「黒い世界」(監督ヘルマン・ワルブリュック, 主演アレクサンダー・カフリック, ルート・ガスマン) 計18本で, 特集として「ヨーロッパ映画地図」(野中重雄氏監修), 「映画に現わ

れたリゾート・ファッション」(青江耿介氏監修), 「1963年度来日主要監督, スターのポートレート及びスナップの展示」, 「歌うヨーロッパ映画スター紹介」(野口久光氏監修)の4コーナーを実施した。これはキングレコード, 日本コロムビア, 日本グラモフォン, 日本ビクター, テイチク, 東芝音楽工業, 映画の友, ユニフランス・フィルム, ウニタリア・フィルムの協力によるもので, とりわけ美しいジャケットに色彩られたシャンソン, カンツオーネなどでおなじみ深いスターの紹介に話題が集中した。

第4回「外国映画展」

昭和40年9月22日(水曜日)から同28日(火曜日)まで新宿伊勢丹に於いて当協会主催, 大映, 日本ヘラルド映画, 松竹映配, 東京第一フィルム, 東急文化会館, 東和6社の協賛, 通産省の後援を得て開催された。

出品作品は, 大映天然色「マリソルの初恋」(監督ジョージ・シャーマン, 主演マリソル, ロバート・コンラッド), 天然色「大反逆」(監督ジョルジュ・ランパン, 主演ルイ・ジュールダン, フランシスコ・ラバル) 日本ヘラルド映画天然色「ゴールデン・ハンター」(監督マリオ・モニチェリ, 主演マルチェロ・マストロヤンニ, ビルナ・リージ), 「フィフィ大空をゆく」(監督アルベール・ラモリス, 主演フィリップ・アブロン, ミレイユ・ネーグル), 天然色「戦争と平和」(監督セルゲイ・ボンダルチュク, 主演リュドミラ・サヴェーリエワ, セルゲイ・ボンダルチュク), 松竹映配天然色「アンクル・トム」(監督ゲッツァ・フォン・ラドバニ, 主演ジョン・キッツ・ミラー, O・W・フィッシャー), 天然色「リーザの恋人」(監督ジェルマン・ロレンテ, 主演モーリス・ロネ, クラウディア・モリ), 「ケネディ大統領=稲妻の2年10ヶ月」(監督ブルース・ハーシェンゾーン, 長篇記録映画), 東京第一フィルム「明日に生きる」(監督マリオ・モニチェリ, 主演マルチェロ・マストロヤンニ, レナート・サルバトーリ), 東京第一フィルム「マタ・ハリ」(監督ジャン・ルイ・リシャール, 主演ジャンヌ・モロー, ジャン・ルイ・トランティニヤン), 「鬼戦車T34」(監督



▲ 第4回・展
▼ 第5回・展



ニキータ・クリーヒン、レオニード・メナケル、主演バチスラフ・グレンコフ、ゲンナジー・ユフチン）東急文化会館「サンタ・バルバラの誓い」（監督アンセルモ・デュアルテ、主演レオナルド・ビラル、グロリヤ・メネゼス）、東和天然色「赤い砂漠」（監督ミケランジェロ・アントニオーニ、主演モニカ・ビッティ、リチャード・ハリス）、「革命の河」（製作モリス・エルガス、長篇記録映画）、「汚れなき抱擁」（監督マウロ・ボロニーニ、主演マルチェロ・マストロヤンニ、クラウディア・カルディナーレ）計15本で、特集として「ラブ・シーンに見る映画の歩み」（淀川長治氏監修）、「愛のテーマにちなむ名曲鑑賞」（野口久光氏監修）、「ラブ・シーンに現われたファッション」（原田謙二氏監修）の3コーナーが披露された。

これはキングレコード、日本コロムビア、日本グラモフォン、日本ビクター、テイチク、東芝音楽工業、映画の友、近代映画社、雄鶏社の協力によるもので、過去3回の経験を十分に生かし、出来るだけ立体感を出すようにしたため、総体的に評判が良かったし、会場を初めて新宿に移した事も新しい試みとして注目さ

れた他、9月22日（水曜日）、24日（金曜日）、28日（火曜日）の3日間伊勢丹ホールで「汚れなき抱擁」（東和）、「明日に生きる」（東京第一フィルム）、「ケネディ大統領＝稲妻の2年10カ月」（松竹映配）の特別試写会が開かれた。

第5回「外国映画展」

昭和41年6月10日（金曜日）から同15日（水曜日）まで新宿西口京王百貨店に於いて当協会主催、大映、日本ヘラルド映画、松竹映配、東京第一フィルム、東和5社の協賛、通商産業省の後援を得て開催された。

出品作品は、大映天然色「南太平洋」（監督ジョシュア・ローガン、主演ロッサノ・ブラッツィー、ミッチー・ゲイナー）、「GO—GO・ビキニ」（監督ロバート・スパー、主演ジェイムス・ステイシー、リー・チャップマン）、天然色「ビキニ・マシン」（監督ノーマン・タウログ、主演ビンセット・ブライス、フランキー・アバロン）、日本ヘラルド映画天然色「幸福」（監督アニェス・バルダ、主演ジャン・クロード・ドルオー、クレール・ドルオー）、「河の女」（監督マリオ・ソルダーテ、主演ソフィア・ローレン、リク・バッタリア）、天然色「戦争と平和」（監督セルゲイ・ボンダルチュク、主演リュドミラ・サベリエワ、セルゲイ、ボンダルチュク）、松竹映配天然色「太陽が目にしみる」（監督ファン・アントニオ・バルデム、主演ハーディ・クリューガー、メリナ・メルクーリ）天然色「殺しのテクニック」（監督フランク・シャノン、主演ロバート・ウェーバー、ジャンヌ・バレリー）、「愛の奇跡」（監督ジョン・カサベテス、主演バート・ランカスター、ジュディ・ガーランド）、東京第一フィルム「禁じられた情事」（監督J・B・タンコ、主演ベラ・ピアンナ、ジェチェ・バラダノ）、天然色「荒野の1ドル銀貨」（監督カービン・ジャクソン・パジエット、主演モンゴメリー・ウッド、イブリン・スチュアート）、「必死の逃亡者」（監督ウィリアム・ワイラー、主演ハンフリー・ボガード、フレドリック・マーチ）、東和天然色「オセロ」（監督スチュアート・バージ、主演ローレンス・オリビエ、マギー・スミ

第6回展・世界最初のフィルム供養写真左より中村晃子・沢井桂子



写真・左から城戸松竹社長と池田大映取締役の両氏



ス)天然色「赤と黒」(監督クロード・オートンニラ、主演ジェラルド・フィリップ、ダニエル・ダリュウ)「奇跡の丘」(監督ピエル・バオロ・パゾリーニ、主演エンリケ・イラゾーキ、マルチェロ・モランテ)計15本で、特集として「スターの愛用車とヨーロッパ自動車旅行」、「リゾート・シネマ・ファッション」、「スクリーン ana モダン・ジャズ」(野口久光氏監修)「グラマー女優のすべて」(筈見有弘氏監修)の4つが披露された。

これは日本自動車連盟、コーンズ・アンド・カンパニー・リミテッド、三和自動車、アリタリア航空、三愛、パイオニア、安井かずみ、中平穂積、映画の友、近代映画社、キネマ旬報社、フィルム・ライブラリー助成協議会の協力によるもので、中でも「スターの愛用車とヨーロッパ自動車旅行」は、ヨーロッパ各地の道路標識、免許証、外車の実物展示などを織りませ、あたかも居ながらにしてヨーロッパを自動車で旅行しているようなムードを出したため、かつてない反響を巻き起し、会場のスペースが広大だった事も手伝い、空前の成果を収めた。

第6回「外国映画展」

昭和42年8月12日(土曜日)から同16日(水曜日)まで新宿伊勢丹に於いて当協会主催、大映、日本ヘラルド映画、松竹映配、東京第一フィルム、東和5社の協賛、通商産業省の後援、モロゾフ酒造の協力を得て開催された。

出品作品は、大映天然色「夕陽のモヒカン族」(監督ハラルド・ラインル、主演ダン・マーティン、アンソニー・ステファン)、天然色「武器よさらば」(監督チャールズ・ビダー、主演ロック・ハドソン、ジェニファー・ジョーンズ)、天然色「地獄のガイドブック」(監督ラルフ・トーマス、主演ダーク・ボガード、シルバ・コシナ)、日本ヘラルド映画天然色「戦争と平和」(監督セルゲイ・ボンダルチュク、主演リュドミラ・サベリエワ、セルゲイ・ボンダルチュク)、天然色「天使の詩」(監督ルイジ・コメンチーニ、主演アンソニー・クエイル、ステファノ・コラグ

ランデ)、天然色「ロミオとジュリエット」(監督レナート・カステラーニ、主演ローレンス・ハーベイ、スーザン・シェントール)、松竹映配天然色「続・殺しのテクニック人間標的」(監督ハル・ブラディ、主演ヘンリー・シルバ、エブリン・スチュアート)、天然色「エヴァの恋人」(監督ピエール・ガスパール＝ユイ、主演ミレイユ・ダルク、ジャック・シャリエ)天然色「セシルの恋人」(監督セルジュ・ブールギニョン、主演ブリジット・バルドー、ローラン・テルジェフ)、東京第一フィルム天然色「凶悪犯」(監督ベルナール・ボルドリ、主演ロベール・オッセン、レイモン・ペルグラン)、天然色「アッパーセブン神出鬼没」(監督アルベルト・デ・マルチーノ、主演ボール・ハブシュミット、ナンド・ガッツォーロ)、「誘惑」(監督ジョルジュ・スカレナキス、主演エレナ・ナサナエル、スピロス・フォーカス)、東和天然色「ふたりだけの窓」(監督ジョイ and ロイ・ボウルティング、主演ヘイリー・ミルズ、ハイウェル・ベネット)天然色「昼顔」(監督ルイス・ブニュエル、主演カトリヌ・ドヌーブ、ジャン・ソレル)天然色「太陽のならず者」監督ジャン・ドラノワ、主演ジャン・ギャバン、ロバート・スタック)計15本で、特集として「文芸映画名作集」(筈見有弘氏監修)、「マカロニ・ウェスタンのすべて」(大山礼二氏監修)「映画ファンへの10の質問」が披露された。

これは河出書房、南雲堂、中田商店、キングレコード、日本ビクターの協力によるもので、両特集とも小道具を豊富に取り入れたのと、時期的に洋画界の2大ブーム的な傾向のものだったため、かなり評判を呼んだ。

尚これとともに、8月12日(土曜日)から同16日(水曜日)まで7階ホールに於いて「思い出の名画鑑賞会」が行われ、「ピアンカ」(大映)、「わんぱく戦争」(日本ヘラルド映画)、「現金に手を出すな」(松竹映配)、「ウンベルト・D」(東京第一フィルム)「雨のしのび逢い」(東和)の5本が上映されるとともに、8月12日(土曜日)には屋上で世界最初の「フィルム供養」という画期的な催しが発見した。

<各部会の活動>

■ 理事会の活動

理事会は、昭和33年7月29日（火曜日）の第1回会合を皮切りに、昭和42年11月10日（金曜日）の第92回会合まで原則として毎月定例会合を開催する他、必要に応じて随時臨時、緊急会合を持っている。

発足当時の顔ぶれは、会長川喜多長政（東和映画）副会長塩次秀雄（映配）理事島田八洲直（NCC）同鈴木一誠（新外映配給）同月森仙之助（松竹）同米本正（東宝）同浅野辰雄（大映）同武田俊一（新東宝）監事山梨稔の合計9氏で、2年に一度役員の任期満了に伴う改選を行っているが、その後メンバーは幾度も変動し、現在は会長川喜多長政（東和）常務理事曾我正史（東京第1フィルム）理事城戸四郎（松竹映配）同古川勝己（日本ヘラルド映画）同松山英夫（大映）監事田村幸彦の合計6氏となっている他、昭和41年9月から工藤明（東和）同月森仙之助（松竹映配）同波多野三郎（日本ヘラルド映画）同島田八洲直（東京第1フィルム）のメンバーによる副理事制を設け、理事が事故の際の代行及び理事の補佐を担当している。尚、この間に理事会が審議した主要事項、

- (1)映画産業団体連合会への加入
- (2)外画輸入方針の合理化
- (3)外画輸入割当の利権化防止
- (4)NCC、新外映両社の補償割当
- (5)「第1回西独映画祭」の開催
- (6)外国映画の配給に関する「業務説明書」の作成
- (7)ナイトショーに関する諸問題
- (8)日本音楽著作権協会が作成した「著作物使用料規定」改正案に関する諸問題
- (9)特別調整割当交付後の外画対策
- (10)税関手続の簡素化
- (11)「税関定率法」の一部改正に関する件
- (12)外画各社渉外担当者合同懇談会の発足
- (13)クォータ・ショーの廃止、欧州映画の蓄積円解除
- (14)為替自由化対策
- (15)最低保障用外貨割当、蓄積円解除に付いての差別待遇撤廃

- (16)入場税対策
- (17)全国洋画専門上映館名簿の作成
- (18)米メイジャー系の欧画買付け、歩合制映画の最低保障に関する件
- (19)外画配給会社乱立調整に関する件
- (20)フィルム・ライブラリー助成協議会への協力
- (21)外国映画プログラムの製作、販売権に関する件
- (22)プリント費等の外国送金額に対する源泉徴収税に関する件
- (23)歩合制契約に基づく最低保障金規定改訂及び日本映画輸出ボーナスによる輸入契約国制限廃止に関する件
- (24)長篇外国映画のテレビ放映に関する件
- (25)米メイジャー系の包括契約に関する件
- (26)昭和38年度外画輸入方針に基づく邦人系調整割当4本の配分
- (27)外国映画の自由化に伴う特殊な映画の輸入増加に関する件
- (28)テレビで放映済の劇場用映画の興行に関する件
- (29)「南海の楽園」、「新・残酷物語」両作品の同一場面重複問題
- (30)映倫成人向指定映画に関する件
- (31)「世界最後の秘境・ガスパゴス」「怪獣島ガスパゴス」との類似題名問題
- (32)芸術議員連盟との懇談
- (33)大蔵省外画輸入割当関係者との懇談
- (34)日本映画特別上映制度に関する件
- (35)スクリーン・クォーター制度に関する件
- (36)配給稼動中の外画の国内調査に関する件
- (37)全興連主催の組合加入懇懇運動への協力
- (38)外国映画の通関手続きに関する件
- (39)各種新聞の広告料金値上げ問題

■ 総務・経理部会の活動

総務、経理部会は、昭和37年3月16日（金曜日）の第1回会合を皮切りに、昭和42年11月20日（月曜日）の第53回会合まで、原則として第2金曜日に定例会合を開催する他、必要に応じて随時臨時、緊急会合を持っている。発足当時のメンバーは中島勇、草野茂雄（東和）、小松原義貞、比留間万吉（映配）、飯田正夫、高橋豊一、林一郎（松竹セレクト国際映画）、六車昭、竹内洋史（大映）、淡谷光彦、赤木滋美（日本ヘラルド映画）、川合淳、大西茂樹（イタリフィルム）、原島真一、春原照男（昭映フィルム）、尾崎浩資、赤沼義夫、加藤正四（大蔵映画）、表清作、中込純次、佐生吉之助、荒川正久（新外映配給）、竹内清和（事務局長）の合計23氏で、各社が3ヶ月間持ち廻りで当番幹事を担当しているが、その後正、副両委員に幾度か

変動があり、現在のメンバーは石井達雄、草野茂雄、今江広治、山下一雄（東和）、河合安次郎、吉野四郎、比留間万吉、坂良三（松竹映配）、淡谷光彦、赤木滋美、渡辺清、立松健（日本ヘラルド映画）、川合淳、堀口正平（東京第1フィルム）、大山泰（大映）となっている。

尚、この間に、同部会が行った主要活動は、

- (1)入場税法改正に伴う諸対策の研究
- (2)不渡り手形、小切手に関する調査
- (3)各社社名広告に対する統一步調
- (4)各社の職制及び人員配置一覧表の作成
- (5)プリント費の外国送金額に対する源泉徴収税に関する研究
- (6)団体動員券の取扱いに関する諸対策の研究

■製作＝渉外部会の活動

製作＝渉外部会は、昭和37年3月28日（水曜日）の第1回会合を皮切りに、昭和42年11月9日（木曜日）の第57回会合まで原則として第1金曜日に定例会合を開催する他、必要に応じて随時臨、緊急会合を持っている。発足当時のメンバーは、清水晶、石井達雄（東和）遠藤隆、佐藤一夫（映配）三品修（松竹セレクト国際映画）河野英一、秋山茂（日本ヘラルド映画）田村幸彦、板垣直栄（大映洋画部）、斎藤信太郎（イタリアフィルム）、原島真一、五味美恵子（昭映フィルム）原田喜、武田俊一（大蔵映画）中込純次、大西昌美（新外映配給）竹内清和（事務局長）の合計17氏で、各社が3ヶ月間持廻りで当番幹事を担当しているが、その後正、副両委員に幾度か変動があり、現在のメンバーは神田末茂、白州春正、山崎剛太郎、大条成昭（東和）佐藤一夫、白井尚之（松竹映配）河野英一、秋山茂（日本ヘラルド映画）中野繁雄、小林保彦（東京第1フィルム）小山好郎、楠原和明（大映）となっている。

尚、この間に、同部会が行った主要活動は、

- (1)輸入許可申請窓口の日銀移官
- (2)暫定割当の一括支払いに関する対策
- (3)外貨送金に対する源泉課税
- (4)フィルム・ライブラリーへのプリント寄送に関する協力と手続き
- (5)配給期間継続中の劇映画のテレビ放映防止
- (6)税関検閲問題を巡る衆議院大蔵委員会の公聴会傍聴
- (7)第1回「秋の外国映画展」の特集テーマ「外国映画が公開される迄」への協力
- (8)カラー・フィルムのプリントコストに関する情報交換
- (9)ドキュメンタリー映画の日本語解説版に関する情

報交換

- (10)翻訳者に関する情報交換
- (11)成人映画指定問題を中心とする映倫との懇談会
- (12)製作・渉外関係諸費用の値上対策
- (13)映画フィルムの滞貨整理
- (14)自由化によって生ずる輸入手続きに関する諸問題
- (15)「著作物使用料規定」に関する諸問題
- (16)公正取引委員会から申し入れがあった国際取引に関する届出に就いての報告書提出
- (17)東京税関から申し入れがあった外国映画の通関手続きの現状に対する資料の作成

■営業部会の活動

営業部会は、昭和37年3月26日（月曜日）の第1回会合を皮切りに、昭和42年11月27日（月曜日）の第51回会合まで、原則として隔月の第4金曜日に定例会合を開催する他、必要に応じて随時臨時、緊急会合を持っている。発足当時のメンバーは佐孝正夫、大島亀太郎（東和）谷口弘文、加藤武治（映配）徳岡孝、田中孝一郎（松竹セレクト国際映画）六車昭一、白石善嗣（大映洋画部）吉野金太郎、蛭沢功一（日本ヘラルド映画）伊沢誠康、清水素郎（イタリアフィルム）守屋彦駒、柑子山敬（昭映フィルム）小野北男、今井剛三（大蔵映画）鈴木健三、浅石巖（新外映配給）竹内清和（事務局長）の合計19氏で、各社が3ヶ月間持廻りで当番幹事を担当しているが、その後正、副両委員に幾度か変動があり、現在のメンバーは佐孝正夫、鈴木功（東和）島掛健、鈴木実（松竹配給）谷川力、沖本忠晴（日本ヘラルド映画）伊沢誠康、倉持昌弘（東京第1フィルム）金指純雄、岩松貞夫（大映）竹内清和（事務局長）となっている。

尚、この間に、同部会が行った主要活動は、

- (1)全国洋画専門上映館名簿の作成
- (2)不渡り手形、小切手に関する調査
- (3)洋画各社の配収実績表の交換
- (4)映画輸送連合会との懇談
- (5)配給料金の適正化とダンピング防止
- (6)プリントの取り扱いに対する「要望書」の作成
- (7)「スクリーン・クォーター制度」の研究
- (8)「日本映画特別上映制度」の研究
- (9)映団連の「興行形態に関する特別委員会」への「答申書」作成

■宣伝部会の活動

宣伝部会は、昭和37年3月30日（金曜日）の第1回会合を皮切りに、昭和42年11月24日（金曜日）の第60回会合まで、原則として第3金曜日に定例会合を開催する他、必要に応じて随時臨時、緊急会合を持っている。

る。発足当時のメンバーは田中月雄，石井和男（東和）桑原俊，岡田清一郎（映配）駒崎雄司，上条孝美（松竹セレクト国際映画）田村幸彦，宇崎鉄郎（大映洋画部）秋枝富二郎，橘信宏（日本ヘラルド映画）中村二郎，大西茂樹（イタリフィルム）米山五郎，柴山義憲（昭映フィルム）小野北男，青木益男（大蔵映画）池谷公男，大西昌美（新外映配給）竹内清和（事務局長）の合計19名で，各社が3カ月間持廻りで当番幹事を担当しているが，その後正，副両委員に幾度か変動があり，現在のメンバーは石井和男，小池晃（東和）岡田清一郎，米川充治（松竹映配）原正人，高杉直也（日本ヘラルド映画）高季彦，徳山雅也（東京第1フィルム）大場衛，羽村孝雄（大映）竹内清和（事務局長）となっている。

尚，この間に，同部会が行った主要活動は，

- (1)新聞各社への「映画番組紹介欄」設置の要望書提出
- (2)新聞各社の広告料金値上げに関する対策
- (3)不当景品，不当表示防止法案に関する研究
- (4)「外国映画展」の実施
- (5)予告篇に関する研究
- (6)「優秀外国映画輸入配給賞」の実施
- (7)市場調査に関する研究
- (8)各種「外国映画祭」への協力
- (9)本田サンケイ新聞広告局管理部企画調査課長との懇談（議題 映画に関する世論調査の研究）
- (10)山本電通ラジオ，テレビ部長との懇談（議題 アメリカテレビ映画の現状）
- (11)ニッポン放送との提携による西銀座サテライトスタジオを使用する新番組「映画音楽ヒット曲集」の実施
- (12)今井マーケティング・コンビナート代表取締役との懇談（議題 市場調査に関する諸問題）
- (13)梅垣電通ラジオ・テレビ局長との懇談（議題 テレビ界の現状と問題点）

■外国映画通関連絡協議会の活動

（旧称一土会）

外国映画通関連絡協議会（旧称一土会）の活動

外国映画通関連絡協議会（昭和41年2月5日までは一土会と呼称）は，昭和35年1月9日（土曜日）の第1回会合を皮切りに昭和42年11月10日の第75回会合まで原則として第1金曜日（改称前は第1土曜日）に定例会合を開催する他，必要に応じて随時臨時，緊急会合をもっている。発足当時のメンバーは正会員（外国映画の輸入配給に携わる業者）清水晶，富岡一彦（東和映画）遠藤隆，佐藤一夫（映配）秋山茂（NCC）中込純次（新外映配給）別府勝文（松竹セレクト国

際映画）板垣直栄（大映）児島高茂（ヘラルド映画）春原照男（昭映フィルム）中村幹（イタリフィルム）原田害（大和フィルム）田村道美（ユニオン映画）山本静三（メトロ）荒井嘉夫，高倉重康（ユナイト）小林伊宗夫（パラマウント）金井義雄（ワーナー）川崎金太郎（フォックス）鈴木武雄，小峰和義（RKO）諸橋毅（コロムビア）大平義夫（ユニヴァーサル）力石昌美（アライド）賛助会員（外国映画の通関，プリントの製作に当る業者）西日本鉄道，京阪神急行電鉄，東急航空，大和運輸，武蔵運輸，日本デリバリー，ジャパン・フォーワーズ，鶴見倉庫，若林運輸，三幸通運の合計30社で，1年に一度役員の任期満了に伴う改選を行っているが，その後正，賛助両会員に幾度か変動があり，現在のメンバーは，正会員富岡一彦，埴きく子（東和）渡辺留吉（松竹映配）秋山茂，中島進治（日本ヘラルド映画）小林保彦（東京第1フィルム）赤松貞治（大映）内藤憲一（大蔵映画）中沢正雄（日活）山本静三，坂井達也（メトロ）中山巖（パラマウント）金井義雄（ワーナー）川崎金太郎（フォックス）斎藤充（ディズニー）広原祥博（ユニヴァーサル）高倉重康（ユナイト）諸橋毅（コロムビア）賛助会員アオイスタジオ，キヌタ・ラボラトリー，東京現像所，東洋現像所，日本シネアーツ，ヤマハホール，横浜シネマ現像所，三幸通運，ジャパン・フォーワーズ，テトラ工芸，東亜発声，東映化学工業，東京シネセンター，西日本鉄道，日本映字タイプ，ムサシ運輸，リバティ興業となっている。

尚，この間に，同協議会が行った主要活動は，

- (1)業務試写の定義の再検討と回数制限の緩和
- (2)製作試写の定義の再検討と回数制限の緩和
- (3)16ミリテレビ用映画の試写制限撤回
- (4)輸入又は輸出（沖縄，韓国，香港など）の別による保税試写の区分
- (5)本編図書検査済み映画の予告編図書検査の省略
- (6)転送映画の図書検査の省略
- (7)業務試写に於ける名簿提出方法の再検討
- (8)保税工場で作業中，もしくは保税作業完了後の業務試写の取扱い
- (9)保税工場内の作業によって生じたプリントの課税措置の再検討
- (10)ネガだけが送られて来た場合の図書検査の実施方法
- (11)自己用保税試写室における業務試写の許可範囲の拡大
- (12)保税試写室における内貨プリントの搬出入届出の廃止
- (13)次年度のクォータ待ち映画の取扱いに対する全面的制限緩和とその区分の方法
- (14)輸入，為替業務の受付の円滑化と臨時開庁の実施

<主要年表 1958～1967>

● 昭和33年 (1958年)

7 月

29 (火) 新橋倶楽部で設立準備委員会及び創立総会を開催名称を「外国映画配給業者協会」とし、会長に川喜多長政、副会長に塩次秀雄両氏を選任、東和映画、映配、ニッポン・シネマ・コーポレーション、新外映配給、松竹、東宝、大映、新東宝8社を会員として発足することに決定。又同時に事務所を東和映画分室内に設置すると共に、社団法人映画産業団体連合会加入も決議

8 月

8 (金) 川喜多会長映団連理事に就任

12 (火) 大蔵省会議室で大蔵省との懇談会を開催

11 月

27 (木) 大映の理事が浅野辰雄氏より加賀四郎氏に変更

12 月

18 (木) 昭和34年1月5日(月)から事務所を松竹会館9階に移転することを決定

19 (金) 大蔵省会議室で大蔵省との懇談会を開催

24 (水) 第1回「西ドイツ映画祭」への協力決る
当協会の名称を「外国映画輸入配給協会」と改称することを決定



●外国映画配給業者協会の創立総会が7月29日に開かれた。

● 昭和34年 (1959年)

- 1 月
12 (月) 独立映画、昭映フィルム、ヘラルド映画入会により、長谷川豊、荒木俊夫、秋枝富二郎氏理事に就任
- 2 月
16 (月) 会長及び副会長事故の際の島田八洲直理事の代行を決定
- 5 月
19 (火) 第2回「フランス映画祭」の開催決る
28 (木) 昭和34年定時総会を開催 席上常務理事制を設定。松竹、東宝両社退会、松竹セレクト国際映画、中央映画入会により、月森仙之助、米本正両氏理事辞任。小出孝、工藤明両氏理事に就任
- 8 月
24 (月) 独立映画退会により、理事長長谷川豊氏辞任
大洋映画入会により、山口親照氏理事に就任
- 9 月
4 (金) 新外映配給の理事が鈴木一誠氏より中込純次氏に変更
28 (月) ニッポン・シネマ・コーポレーション理事が島田八洲直氏より曾我正史氏に変更
- 12 月
4 (金) 一土会の前身「対東京税関映画各社渉外担当者合同懇談会」の設置を承認

● 一月二十五日より開催されたドイツ映画祭のプログラム。



● 昭和35年 (1960年)

- 1 月
9 (土) 一土会の創立総会を開催
14 (木) イタリアフィルム社入会により、島田八洲直氏再び理事に就任
29 (金) 日本映画海外普及協会会議室で大蔵省との懇談会を開催
- 2 月
10 (水) 大洋映画退会により、山口親照氏理事辞任。ヘラルド映画の理事が秋枝富二郎氏より児島高茂氏に変更
- 3 月
7 (月) 新東宝退会、理事武田俊一、監事山梨稔両氏辞任
17 (木) 大和フィルム社入会により、徳江清太郎氏理事に就任
- 5 月
9 (月) 松竹セレクト国際映画の理事が、小出孝氏より長谷川禎一氏に変更
- 6 月
13 (月) 昭和35年度定時総会を開催
ヘラルド映画の理事が児島高茂氏より林正良氏に変更武田俊一氏会計監事に就任
23 (木) 大蔵省会議室で大蔵省との懇談会を開催
- 7 月
18 (月) 渉外、営業、宣伝の部会の設置決る
- 8 月
15 (月) 東和映画退会、中央映画の東和への名義変更承認により、工藤明氏理事辞任
- 10 月
3 (月) 築地サボイで東京都庁との懇談会を開催
18 (火) 日本映画海外普及協会会議室で大蔵省との懇談会を開催

● 昭和36年 (1961年)

1 月

- 23 (月) フィルム・ライブラリー助成協議会への加入を承認
社団法人認可申請への準備開始を決議

3 月

- 6 (月) 大映の理事が加賀四郎氏より浅原隆三氏に変更

4 月

- 18 (火) 日本映画海外普及協会会議室で大蔵省との懇談会を開催

5 月

- 29 (月) 昭和36年度定時総会を開催

7 月

- 20 (木) 通産省会議室で当協会の社団法人化に関する懇談会を開催

8 月

- 11 (金) ニッポン・シネマ・コーポレーション、ヘラルド映画退会により曾我正史、林正良両理事辞任
日本ヘラルド映画の入会により、古川勝己氏理事に就任、曾我正史氏相談役に就任

10月

- 9 (月) 銀座東急ホテルで輸入映画議審会との懇談会を開催

11月

- 8 (水) 日本映画海外普及協会会議室で通産省との当協会の社団法人化に関する懇談会を開催
29 (水) 日本映画海外普及協会会議室で大蔵省との懇談会を開催
30 (木) 東京会館でアート・シアター・ギルドとの懇談会を開催、「尼僧ヨアンナ」の共同輸入を準備

12月

- 15 (金) 築地サボイで社団法人外国映画輸入配給協会の創立総会を開催

● 昭和37年 (1962年)

3 月

- 13 (火) 通商産業省より正式に社団法人の認可下りる

4 月

- 5 (木) イタリアフィルム社の理事が島田八洲直氏より曾我正史氏に変更、前イタリアフィルム社代表取締役ジュリアナ・ストラミジョーリ女史に表彰状と記念品贈呈を決議

5 月

- 31 (木) 昭和37年度定時総会を開催

6 月

- 8 (木) 日活国際会館ロビーで、竹内事務局長 (川喜多会長代理) からジュリアナ・ストラミジョーリ女史氏に表彰状と記念品を贈呈

8 月

- 3 (金) 銀座東急ホテルで大蔵省との懇談会を開催

10月

- 12 (金) 映配、松竹セレクト国際映画両社退会、松竹映配入会により、理事長谷川禎一氏辞任
本協会の重要年中行事の1つとして、通産省後援による「優秀外国映画輸入配給賞」の制度を決議



●ストラミジョーリ女史に表彰状を贈る

●第1回優秀外国映画輸入配給賞・審査員 運営委員会同会議



11月

- 14 (水) 大蔵映画の理事が徳江清太郎氏より大蔵貢氏に変更 田村幸彦氏会計監事に就任

● 昭和38年 (1963年)

- 1 月
25 (金) 第3回「フランス映画祭」の開催決る
関西、九州、中部、北海道4地区に、各社間の連絡を一層緊密にするため「地方分会」の設置を決議
- 3 月
14 (木) 第1回「優秀外国映画輸入配給賞」は、通産大臣賞が東和、特別賞がコロムビアと決る
22 (月) サミット映画の入会保留
25 (金) 昭和38年度邦人系調整割当4本は、東和、松竹映配、昭映フィルム、大蔵映画に配分と決定
- 4 月
1 (月) 東急文化会館入会により、取締役樋谷健介氏理事に就任 東商スカイルームで第3回「フランス映画祭」来日使節団一行歓迎レセプションを開催
8 (月) 帝国ホテルでユニ・フランスフィルムとの懇談会を開催
17 (水) 製作＝渉外部会関係者と映倫との懇談会を開催
30 (火) ヤマハホールで第1回「優秀外国映画輸入配給賞」の授賞式及び記念試写会を開催
- 5 月
13 (月) 大蔵省会議室で大蔵省との懇談会を開催
23 (木) 昭和38年度定時総会を開催
- 6 月
7 (火) 築地サボイで国税庁との懇談会を開催
12 (水) 日本映画海外普及協会会議室で通産省との懇談会を開催
17 (月) 大映の理事が田村幸彦氏から六車昭氏に変更
- 7 月
2 (火) 山王飯店で新聞各社との懇談会を開催
11 (木) イタリアフィルム社退会、東京第一フィルム入会 第3回「フランス映画祭」に出品された「地下室のメロディー」の輸入をめぐる問題解決
- 8 月
9 (金) 日本映画海外普及協会会議室で大蔵省との懇談会を開催
- 9 月
30 (火) 第2回「外国映画展」の大阪地区開催決る
- 10 月
16 (水) 第2回「外国映画展」の松山地区開催決る

● 昭和39年 (1963年)

- 1 月
13 (月) 日本映画ペンクラブから申し入れのあった仏映画評論家ジョルジュ・サドウル氏の招聘計画に協力を決定 新外映配給の富士映画への名義変更承認
17 (金) 第3回「イタリア映画祭」の開催決る
- 2 月
3 (月) 7月から実施される自由化に備え、米国メジャー系各社に当協会への加入懇慥を決議
- 3 月
5 (火) 帝国ホテルで第3回「イタリア映画祭」来日使節団一行歓迎レセプションを開催
18 (水) 第2回「優秀外国映画輸入配給賞」は、通産大臣賞が日本ヘラルド映画、特別賞が東和と決る
19 (木) 富士映画のヨーロッパフィルムへの名義変更承認
- 4 月
30 (木) 東商ホールで第2回「優秀外国映画輸入配給賞」授賞式及び記念試写会を開催
- 5 月
21 (木) 昭和39年度定時総会を開催
- 6 月
11 (木) 7月から実施される自由化による新規業者の加入問題を協議
16 (火) 尾崎記念会館で「芸術院連盟」との懇談会を開催
- 7 月
24 (金) 山王飯店で大蔵省との懇談会を開催
- 9 月
24 (木) 社団法人日本音楽著作権協会から申し入れのあった「著作物使用料規定」に基づく外国映画の音楽上映使用料問題5年ぶりに解決
- 10 月
5 (水) 第2回「ソ連映画祭」への協力決る
- 11 月
12 (木) ヨーロッパフィルム退会により、理事久保島孝氏辞任
- 12 月
18 (金) ホテルオークラでMPEA極東担当副会長アービング・A・マース氏との懇談会を開催

● 昭和40年 (1965年)

2 月

11 (木) 昭映フィルム退会により、理事荒木俊夫氏辞任

3 月

10 (水) 第3回「優秀外国映画輸入配給賞」は、通産大臣賞が東和、特別賞が日本ユナイテッド・アーチスツ映画と決る

23 (水) ホテルオークラで社団法人日本音楽著作権協会及び全国興行環境衛生同業組合連合会との懇談会を開催

4 月

16 (金) 東商ホール及びスカイルームで第3回「優秀外国映画輸入配給賞」の授賞式及び試念試写会並びにパーティを開催

19 (月) 銀座東急ホテルで「日本映画特別上映制度」に関する懇談会を開催

5 月

21 (金) 昭和40年度定時総会を開催

6 月

12 (土) MPE A極東担当副会長を辞任して帰米するアービング・A・マース氏に記念品を贈呈

16 (水) 第3回「ソ連映画祭」への協力決る

7 月

10 (土) 築地サボイで日本銀行との懇談会を開催

9 月

9 (木) 大映の理事が六車昭氏から松山英夫氏に変更

10月

20 (水) 帝国ホテルで第3回「ソ連映画祭」来日使節団一行午餐会を開催

25 (月) 東京会館で第3回「ソ連映画祭」来日使節団一行歓迎レセプションを開催

11月

26 (金) 築地サボイで「成績日報」のホーム統一準備委員会を開催



● 第3回
イタリア映画祭

● 昭和41年 (1966年)

1 月

14 (金) フィルム・ライブラリー助成協議会から申し入れがあったシネマテーク・フランセーズ代表アンリ・ラングロワ氏の招聘計画に協力を決定

3 月

9 (水) 第4回「優秀外国映画輸入配給賞」は、通産大臣賞がアート・シアター・ギルド、特別賞がウォルト・ディズニー映画に決る

11 (金) 東急文化会館退会により、理事樋谷健介氏辞任

4 月

14 (木) 大蔵映画退会により、理事大蔵貢氏辞任

18 (月) 東商ホール及びスカイルームで第4回「優秀外国映画輸入配給賞」の授賞式及び記念試写会並びにパーティを開催

5 月

30 (月) 昭和41年度定時総会を開催、席上副会長制の廃止を決議

6 月

17 (金) 昭和41年度臨時総会を開催

27 (月) 東商スカイルームで「戦争と平和」公開のため来日したセルゲイ・ホンダルチュク夫妻一行歓迎レセプションを開催

30 (木) 東京会館で樋谷健介、大蔵貢両前理事の送別午餐会を開催

7 月

14 (木) 第4回「フランス映画祭」の開催決る
第4回「ソ連映画祭」への協力決る

8 月

5 (金) 近鉄大飯店で東京国税局 京橋、麹町両税務署との懇談会を開催

9 月

29 (木) 前副会長塩次秀雄氏に感謝状と記念品贈呈を決議、理事の事故の際の代行及び補佐として副理事制の設置を決定し、工藤明(東和)、月森仙之助(松竹映配)、河野英一(日本ヘラルド映画)島田八州直(東京第一フィルム)、池広利夫(大映)の各氏が就任

29 (木) 第1回「スウェーデン映画祭」の開催決る
松竹映配の理事が塩次秀雄氏より城戸四郎氏に変更
タイハイフィルムの入会保留

10月

- 4 (火) 山王飯店で前全ソ連映画輸出入公団駐日代表
N・P・コーシキン, 新全ソ連映画輸出入公団駐日
代表V・G・アレキサンドロフ両氏の歓送迎会開催
- 11 (火) 東商スカイルームで第4回「フランス映画
祭」来日使節団一行歓迎レセプションを開催
- 15 (金) 東京会館でユニ・フランスフィルムとの懇談
会を開催
- 25 (火) 帝国ホテルで第4回「ソ連映画祭」来日使節
団一行歓迎午餐会を開催

11月

- 14 (月) 東商スカイルームで第1回「スウェーデン映画
祭」来日使節団一行歓迎レセプションを開催
- 18 (金) 東京会館でスベンスカ・フィルムインスチュ
ーテッド会長ハリー・シャイーン氏との懇談会を
開催



●スウェーデン映画祭, 来日使節団

2月

- 24 (金) 銀座ACBで洋画各社全宣伝マンの懇親機関
「金曜会」の発会式を開催

3月

- 8 (水) 第5回「優秀外国映画輸入配給賞」は, 通産
大臣賞が日本ヘラルド映画, 特別賞が松竹映配
日本アート・シアター・ギルドと決る

4月

- 13 (木) 東商ホール及びスカイルームで「第5回優秀
外国映画輸入配給賞」授賞式及び記念試写会並び
にパーティを開催

5月

- 25 (木) 昭和42年度定時総会を開催

6月

- 15 (木) 社団法人日本音楽著作権協会から申し入れの
あった「著作物使用料規定」に基づく外国映画
(リバイバル作品) の音楽上映使用料問題解決

7月

- 25 (火) 第6回「外国映画展」の沼津地区開催決る

9月

- 28 (木) 第5回「ソ連映画祭」への協力決る

10月

- 19 (木) 帝国ホテルで全ソ連映画輸出入公団副総裁ア
レクサンドロ・ボリソビッチ・マーホフ氏歓迎午
餐会を開催

11月

- 22 (水) 第1回「創立10周年記念計画委員会」を開催

12月

- 13 (水) 帝国ホテルで第5回「ソ連映画祭」来日使節
団一行歓迎午餐会を開催



●第6回外国映画展・フィルム供養

《加盟会社・商社録》

大映株式会社
日本ヘラルド映画株式会社
松竹映配株式会社
東京第一フィルム株式会社
東和株式会社



大映株式会社

東京都中央区京橋3ノ2 〔T〕 (281)5171・7771 〔営〕映画の製作、配給、販売、興行、各種スポーツの興行およびこれらの施設の経営、不動産の売買、賃貸および運営、レコード等の製造・販売その他付帯事業 〔役〕取締役社長永田雅一、同副社長永田秀雅、専務営業本部長松山英夫、同財務本部長菊池英樹、常務京都撮影所長鈴木昭成、同財務副本部長平野豊一、同テレビ室長武田昌夫、取締役企画製作室長土井逸雄、同東京撮影所長舟橋竜夫、取締役川口松太郎、同萩原吉太郎、同藤山勝彦、同武元忠義・同上原三郎、監査役浅野辰雄、同大塚幸之助、営業本部輸入課長小山好郎、同輸入係長楠原和明、同洋画課長金指純雄、洋画課業務係長（課長待遇）岩松貞夫、洋画課営業係長斉藤利次、同花岡卓二、同松野孝一郎、同佐藤長夫、洋画課宣伝係長大場衛、営業本部経理係長（課長待遇）大山泰 〔資〕40億円 〔創〕昭和17年1月27日 関東支社東京都中央区京橋3ノ2 〔T〕 (281)5171 支社長岡本明信、関西支社大阪市北区堂島船大工町53 毎日大阪会館 〔T〕 (341)7931 支社長樺島覚、営業第1課長土川周一、洋画係長金子昭治郎、九州支社福岡市中洲4—6—10大洋ビル 〔T〕 (28) 1531 支社長百田敏、営業課長岩佐実、洋画係田山文隆、中部支社名古屋市千村区堀内町4—1 毎日名古屋会館 〔T〕 (541)1401 支社長桐山秀次、営業課長中山喜一、洋画係長荒井清太郎、北海道支社札幌市南四条西2丁目1 〔T〕 (51) 7151 支社長増田泰三、営業課長野村尚美、洋画係長石川確郎、米国大映株式会社 Daiei Motion Pictures (U.S.A) Inc. 1350 Avenue of the Americas, New York 10019, N.Y, U.S.A. 〔T〕 (765) 5620

（沿革と現状）

昭和17年1月27日新興キネマ（株）、大都映画（株）を合併、日本活動写真（株）の製作部門を現物出資の形で継承し資本金770万円の大日本映画製作株式会社（代表取締役永田雅一、川合竜斎）設立、昭和18年3月初代社長に菊池寛を迎え、昭和21年1月称号を現在の大映株式会社と改めた。

洋画の輸入及び配給業務に関しては、昭和25年9月15日かねがね交渉中だったウォルト・ディズニー、サミュエル・ゴールドウィン両社との輸入契約成立を機会に洋画部を新設、初代部長を曾我専務が兼任したが、同年11月1日の追放解除の石川俊重が部長に就任、昭和35年3月ウォルト・ディズニーと新作品の契約期間満了を機会に以後主体を自主選択に切り換えて今日に至っている。

洋画部は昭和40年8月廃止され、輸入業務は外国部輸入課配給業務は関東及び支社でそれぞれ行ってきたが、昭和42年2月再び洋画業務の1本化を期して外国部に洋画課、経理係を新設、その後外国部の解消により輸出入部輸入課、洋画課経理係で業務を継続してきたが、同年9月輸出入部は営業本部に統合され、今日に及んでいる。



日本ヘラルド映画株式会社

東京都千代田区内幸町1の2の2第1大阪ビル〔T〕(591) 0251—7・4732 〔営〕外国映画の販売，賃貸，代理店業務，日本映画の売買，賃貸，製作およびその事業に対する出資，観光事業の経営，以上に付帯する一切の事業 〔役〕取締役会長古川為三郎，同社長古川勝己，専務取締役波多野三郎，取締役総務部長淡谷光彦，同製作部長河野英一，同経理部長赤木滋美，同関西支社長仕合実，取締役広江春広，同近藤良彦，同神谷正太郎，同古川俊子，監査役徳川義知，同津村隆子，営業部長谷川力，宣伝部長原正人，営業部次長蛭沢功，渉外部次長橋信宏，記録課長明石元次郎，製作課長秋山茂，渉外課長前田三郎，宣伝課長高杉直也，倉庫課長山田良盛 〔資〕2千7百万円 〔創〕昭和36年7月28日 関東支社東京都千代田区内幸町1の2の2第1大阪ビル〔T〕(591) 0251—7 支社長沖本忠晴，次長山田弘一，セールス課長待遇井東知三，関西支社大阪市北区堂島船大工町53毎日大阪会館〔T〕(361) 3224・3812 宣伝課長橋健彦，渉外課長待遇浅井享，セールス課長待遇井上周三，九州支社福岡市中洲4の6の12花ノ関ビル〔T〕(23) 1022・6352 支社長緒方用光 中部支社名古屋市中区栄3の35の34中日シネラマ会館〔T〕(261) 3436—7 支社長村岡邦彦，北海道支社札幌市南一条西1の5北宝ビル〔T〕(22) 9371，(23) 1010 支社長白井正和

(沿革と現状)

昭和31年3月映画の制作，配給，興行の目的で名古屋市に欧米映画配給社の商号を以って資本金40万円で業務を開始，昭和32年10月商号をヘラルド映画株式会社と変更，昭和33年11月本店を東京銀座に移し，昭和35年3月大洋映画株式会社，北欧映画株式会社と合併，更に昭和36年7月株式会社ニッポン・シネマ・コーポレーションを吸収合併すると共に，社名を現在の日本ヘラルド映画株式会社と改称し，資本金9百万円で新規に発足，その後の増資により現在に至っている。

その間「アメリカの裏窓」で昭和36年度文部大臣奨励賞，「チコと鮫」，「突然炎のごとく」等で昭和38年度通産大臣賞，「突然炎のごとく」で昭和39年度NHK最優秀作品賞，「幸福」，「戦争と平和」等で昭和41年通産大臣賞を再度受賞した他，「太陽はひとりぼっち」，「わんぱく戦争」，「戦争と平和」等で読売新聞映画広告賞を受賞すると共に，労映，全国文化運動協会等各種団体からも数々の最優秀映画賞を受与されており，最近も「気狂いピエロ」「天使の詩」などバラエティにとんだ作品を配給している。



松竹映配株式会社

東京都中央区銀座東7の6大栄会館〔T〕(541)4811—9・5856—9・8392・7901 〔営〕映画の輸入，テレビ映画の輸入 〔役〕代表取締役社長城戸四郎，取締役副社長月森仙之助，常務取締役営業宣伝担当下山鉄三郎，同西日本営業担当上田文一，取締役総務経理担当河合安次郎 同関西支社長作田星雄，同営業部長兼関東支社長島掛健，取締役大谷竹次郎，同白井昌夫，同川辺正夫，同後藤友二，監査役高見宏，経理部長吉野四郎，宣伝部長岡田清一郎，製作部長佐藤一夫，営業部次長鈴木実，総務課長比留間万吉，経理課長坂良三，営業計算課長多田良栄一，宣伝課長米川充治 広告課長古川忠 〔資〕6000万円 〔創〕昭和37年10月1日 関東支社東京都中央区銀座東7の6大栄会館〔T〕(541)4811—9 営業課長石川富康，記録課長佐藤一石，関西支社大阪市北区堂島船大工町53毎日大阪会館〔T〕(341) 8573—4 (361)1341—9，宣伝部長堀岡新次郎，総務課長多田一義，営業課長脇昭智，宣伝課長上住春夫，九州支社福岡市中洲4丁目6—12花ノ関ビル〔T〕(29) 3183 (28) 0631—3 支社長五谷新之助，営業課長西谷義彦，宣伝課長安田虎走太，中部支社名古屋市中区栄1の3の3朝日ビル，支社長磯谷功 営業課長岩田敏男，宣伝課長松波義昭，北海道支社札幌市大通西3丁目松竹ビル〔T〕(22) 7633 (23) 5383 支社長森口高明，営業課長吉田政行，ローマ駐在所 VIA FRANCESCO, D'OVIDIO, 83,00137 ROMA ITALIA 代表藤井順一，ニューヨーク駐在所 551 5TH AVN, NEW-YORK, N.Y, 10017 U.S.A 代表サミュエル・石川 パリ駐在所 23, RUE BOYER BARRET, PARIS14 EME, FRANCE 代表浜中勝

(沿革と現状)

昭和37年10月設立，松竹国際株式会社と映配株式会社の業務を引き継ぎ資本金3000万円で発足，昭和39年6000万円に増資したが，昭和41年8月松竹株式会社社長城戸四郎の同社社長就任にともない，株式全部を所有して完全に松竹の傍系会社となり，現在に至っている。

昭和42年度に配給した「アルジェの戦い」は，同年度「キネマ旬報」，「スクリーン」，「映画の友」等各方面が選出した外国映画部門のベスト・テン第1位を独占したが，昭和41年4月東急文化会館の配給業務を引継ぐと共に，昭和42年2月日本支社を閉鎖したアライド・アーチスツ社と日本地域配給に関する契約が成立，又同年12月にはシネラマ会社が製作するシネラマ映画と，劇場用映画の製作に乗り出した米ABCテレビ作品を世界に配給するために設立されたシネラマ・インターナショナル・レリーシング・オーガニゼーション（略称CIRO）と全面的な提携が成立，日本地域に於ける独占配給契約を締結すると共に，第1作「カスター將軍」以下年間12本程度の配給本数を予定し，飛躍的發展を期している。



東京第一フィルム株式会社

東京都千代田区有楽町1の1日活国際会館〔T〕(212) 3421—6 〔営〕映画の輸出入、製作、配給、これに付帯する一切の事業 〔役〕代表取締役社長曾我正史、取締役南條徳男、同水島広雄、監査役石崎重郎、副社長島田八洲直、営業支配人兼関東支社長伊沢誠康、総務部長川合淳、宣伝部長高季彦、製作部長中野繁雄 〔資〕1千万円 〔創〕昭和38年7月1日 関東支社東京都千代田区有楽町1の1日活国際会館〔T〕(212) 3421—6 関西支社大阪市北区堂島船大工町53毎日大阪会館〔T〕(361) 8973—4、支社長山本勇、九州支社福岡市中洲4—6—12、花ノ関ビル〔T〕(28) 1620・0631 支社長久原忠、中部支社名古屋市中区錦3—24—20坂種ビル〔T〕(971) 3863 支社長酒井英次、北海道支社札幌市南一条西1の5北宝ビル〔T〕(22) 9054 支社長高田襄

(沿革と現状)

「戦火のかなた」、「靴みがき」、「自転車泥棒」、「ドイツ零年」、「道」、「鉄道員」などイタリアン・リアリズムの代表作を通じてイタリア映画輸入史上に一時代を画し、昭和35年1月「奥様ご用心」で自主配給を開始、引き続き「甘い生活」、「ロベレ将軍」などの問題作を提供してきたイタリアフィルム有限公司(代表取締役ジュリアナ・ストラミジョーリ氏)を、昭和38年7月前大映株式会社専務取締役曾我正史が吸収し、社名を東京第一フィルム株式会社(資本金1,000万円)として新発足したもので、その後「誰が為に鐘は鳴る」、「西部戦線異状なし」などのリバイバル作品、「荒野の一ドル銀貨」、「情無用のジャンゴ」、「続・荒野の一ドル銀貨」などのマカロニ・ウエスタンの相次ぐヒットから、業務内容がきわめて好調の波に乗り、今日に至っている。

東和株式会社

東京都中央区銀座2の2プレイガイドビル〔T〕(562)0111 〔営〕外国映画輸入配給 〔役〕代表取締役社長川喜多長政、取締役副社長工藤明、取締役清水雅、同森岩雄、同金子操、同営業部長佐孝正夫、同川喜多かしこ、同経理部長草野茂雄、同総務部長石井達雄、同清水陶冶、同外国部長白洲春正、同製作部長神田末茂、同社長室長松岡功、監査役松岡増吉、同米本正、同山田好文、参与野口久光、総務課長今江広治、経理課長山下一雄、経理部高橋達吉、外国課長大条成昭、外国部青山敏美、製作部次長山崎剛太郎、宣伝部長石井和男、宣伝部次長小池晃、広告課長吉村信次郎、企画課長大平和登、営業部次長鈴木功、営業部次長池田元栄、営業部岡田和雄、業務課長松原義己、調整課長大原一郎、営業部佐久間正雄、営業課長関野達雄、渉外部次長深沢一夫、渉外部松倉郁夫、〔資〕5千4百万円 〔創〕昭和3年10月10日 関東支社東京都中央区銀座2の2プレイガイドビル〔T〕(562)0111、支社長椿正夫、関西支社大阪市北区中之島ノ朝日ビル〔T〕(231) 5667—8、支社長福田勇、九州支社福岡市中洲5ノ5ノ1福岡宝塚会館〔T〕(28) 0613—5、支社長稲辺俊弘、中部支社名古屋市中区栄1ノ3ノ3朝日ビル〔T〕(231) 4594、5954 支社長中島勇、北海道支社札幌市南一条西1丁目北宝ビル〔T〕(24) 0515—6、支社長藤井淳、パリー駐在事務所 c/o Queen Elizabeth Hotel 43, Ave Pierre Ier-deSerbie Paris 8e FRANCE 志賀直忠、ローマ駐在事務所 Via Reno 4 Roma Italia 清水馨

(沿革と現状)

昭和3年10月10日東和商事合資会社(代表者川喜多長政)を設立、欧洲映画の輸入配給業務を開始、昭和10年日独合作映画「新しき土」、同13年セミ・ドキュメンタリー映画「東洋平和の道」等を製作したが昭和17年政府は映画統制を実施して社団法人映画配給社を創設し、邦洋全映画の配給を一元化したため東和商事も全作品を委託、その映画から生じた配給歩金全額を官民合同で組織管理した「川喜多基金」に寄附中国留学生の為の大東亜寮や中華電影研究所の設立、終戦後の海外映画人引揚援護資金等に充てられた。

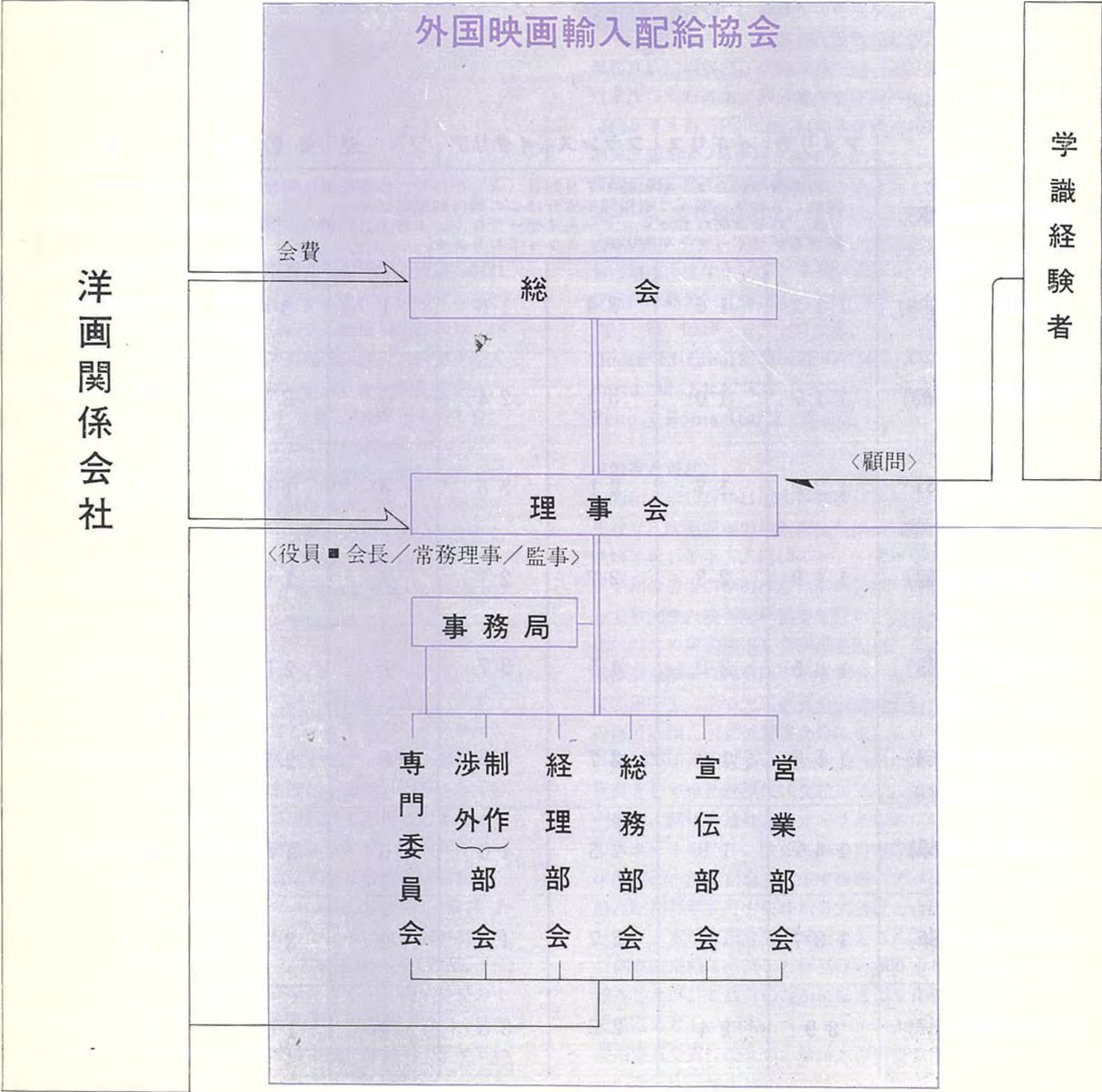
昭和25年秋川喜多の追放解除と共に26年3月川喜多長政を社長として東和映画株式会社が発足、東和商事の業務一切を引継ぎ、同年6月ロンドン・フィルム「ジャングルブック」でスタートを切り、欧洲映画の自主配給を開始すると共に、中国映画「清宮秘史」、印度映画「アーン」等の異色作も配給、昭和35年8月中央映画株式会社と合併して東和株式会社となり、本年は創立40周年を迎えることになっている。

創立以来輸入公開した作品は約800本その他短篇も数多く輸入したが、これ等のなかにはキネマ旬報ベスト・テン第1位を占めたもの16本、ベスト・テン入選作品78本、文部大臣芸術祭賞受賞作品9本、通産大臣賞受賞作品2本、その他数々の受賞作品がある。

■10年間の外国映画概況■

	アメリカ	イギリス	フランス	イタリア	ソ 連	そ の 他	計
昭和33年(1958)	当協会の創立は、昭和33年7月29日(火)なので、外国概況は昭和34年4月から調査を開始しており、従って昭和33年度分はこの表に御座居ません。 尚、対象は何れもカレンダー・イヤーでなく、4月1日に始まり、翌年3月末日で終るいわゆる「クォーター年度方式」となっております。						
昭和34年(1959)	1 1 2	1 6	3 4	1 6	1	3 4	2 1 3 本
昭和35年(1960)	1 1 7	1 0	3 4	2 4	5	2 3	2 1 3 本
昭和36年(1961)	1 2 9	1 7	2 1	3 6	3	1 8	2 2 4 本
昭和37年(1962)	1 4 9	2 3	2 7	2 7	7	1 6	2 4 9 本
昭和38年(1963)	1 3 5	2 0	4 5	3 7	2	2 0	2 5 9 本
昭和39年(1964)	1 5 6	1 3	2 7	3 8	6	2 3	2 6 3 本
昭和40年(1965)	1 4 7	1 9	2 5	4 0	6	2 5	2 6 2 本
昭和41年(1966)	1 3 7	1 7	2 7	4 0	2	2 1	2 4 4 本
昭和42年(1967)	8 9	2 4	2 2	3 8	2	1 0	1 8 5 本

＜外国映画輸入配給協会＞組織表
役員一覧



会長



川喜多長政

常務理事



曾我 正史



城戸 四郎



古川 勝己



理事

松山 英夫



工藤 明



月森仙之助



波多野三郎



副理事

島田八洲直

会計監事



田村 幸彦



事務局長 竹内 清和

社団法人外国映画輸入配給協会
東京都中央区築地 1-13-5 松竹会館 9 階

発行人
集人
行所
印刷

川喜多長政
竹内清和
昭和43年3月13日
成旺印刷株式会社



仏政府から川喜多長政氏に授勲

東和株式会社社長，外国映画輸入配給協会会長川喜多長政氏は、この程フランス政府より「クロク・ド・ラ・レジョン・ドヌール・シュバリエ」勲章を授与されることになった。

これは同氏が永年の間フランス映画の輸入配給を通じて、フランス文化及び芸術の紹介に努めるとともに日仏両国間の文化交流、国際親善に果した功績を高く評価されたためである。

川喜多氏は、昭和34年(1959)6月にも、すでに芸術文芸勲章(オフィツエ)を授与されているが、「クロク・ド・ラ・レジョン・ドヌール・シュバリエ」は、ナポレオン時代に制定された同国で最も権威ある勲章で、映画人としては同氏が始めてその栄与に浴したわけだが、近くルイ・ド・ギランゴ―駐日フランス大使の手を通じて手渡されることになっている。

祝・外配協創立10周年



松竹株式会社

東京都中央区築地 1-13-5

取締役社長 城戸四郎

東京 <542> 5551



東宝株式会社

東京都千代田区有楽町 1-14

取締役社長 松岡辰郎

東京 <591> 1211



新日本興業株式会社

東京都渋谷区桜丘町 41

取締役社長 大塚秀雄

東京 <462> 2131~9



OS映画劇場株式会社

大阪市北区角田町 2

取締役社長 川端直信

大阪 <361> 3554~8

**Tenth Anniversary
of Foreign Film Importer-Distributors
Association of Japan**

